

校区のあゆみ

羽根井

豊橋校区史

44

Hanei







校区のあゆみ

羽根井



【絵図左上の文】

「此度御村方絵図面、御仕立出来なれに付き、拙者ども村方御村
方と境目の所において相違はなく印形いたし進むべく旨、即ち相
改め候処、相違これ無く候間印形致し遣わし候もの也」



【絵図左下の文】

「郷村の田、野の界、今分明と雖も径年の久しく至り、若し大風、甚雨の為消亡の所の有るは則後水際の処、
訟う恐れ有り、花ヶ崎村の里、まさに患の已久矣、故に界境の図を後の證ために我輩にねがってきた。於この
因の測量法は分間縮を六尺を三厘と為し（二千分の一）推尋し而して図画に應需した、然しと雖も路に至って
は細道、土手、溝、どぶ、の狭く小さいものは一厘の十分の一となり筆にすることができない、故有不応分量
者且、あぜ、畑、田の界の繋の多きは不悉測量し、凡空眼（星を觀測し位置を定め）をもつて悉不測量を究、
大概爾」

文化十一年甲戌夏四月

三河吉田藩士 小池是知 同校
同 牟呂村住 牧野祐之

花崎村繪圖

用

是まで村繪圖これ無き故、後々境目などの事につき異論これ無き様、この度、庄屋、組頭、長百姓、相談の上隣村役人え掛け合ひ、境目あい改め、さて、そのむきの巧者の人を頼み繪圖四枚なし成いたし、ついで、境目々々え隣村当時役人の印形を乞請い、三枚は村産神の三社え奉納、壹枚は村役人預け置くのもの也



【繪圖右下の文】

「是まで村の繪圖これ無き故、後々境目などの事につき異論これ無き様、この度、庄屋、組頭、長百姓、相談の上隣村役人え掛け合ひ、境目あい改め、さて、そのむきの巧者の人を頼み繪圖四枚なし成いたし、ついで、境目々々え隣村当時役人の印形を乞請い、三枚は村産神うぶすなのかみの三社え奉納、壹枚は村役人預け置くのもの也」

未来への担い手たち



往完保育園運動会(上)
花ヶ崎保育園運動会(左)
生まれて初めての集団生活、泣きながら母親と通った保育園。今では笑顔でいけるようになりました。みんなががんばった運動会のマ스ゲームも見事にできました。



羽田中学校体育祭(上)
自分たちで企画、運営した体育祭。団結心で、統制のとれたクラスマッチ。
羽根井小学校運動会(右)
6年生になると心身ともに成長し、こんなに大きくなりました。「よく学び、よく遊べ」羽根井小学校で良かった。



土曜ひろば「そうめん流し」(上)
子どもの余暇をどう過ごすか、世代間交流を含めて楽しみながら物事を学ぶひととき。

スポーツフェスタ「むかで競走」(左)
スポーツを通じて地域の「和」とコミュニケーションづくりに力いっぱいがんばった。

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものにと終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
羽根井校区総代会長

夏 目 章 一

豊橋市制100周年記念事業の一環として各校区で校区史を編集、発刊することになりました。自分の校区を見直し、再発見することが出来る大変よい機会であります。

遠い過去を振り返ってみると、先人の歩んで来た道には、幾多の努力や困難を乗り越えてきたことが分かります。この校区史発刊によって、羽根井校区が今以上に平和で明るく住みよい校区になるために、何ができ、また何をしなければならぬかを考える手だてとなればと思います。

この校区史が発刊できたのは編集委員の皆さんを始め多くの方々のご支援とご協力のおかげであることを忘れてはなりません。

わが羽根井校区が、文化、経済共々栄え、発展していくために、特に若い人たちに期待するところ大なるものがあります。地域に見合う先見性と新しい時代にマッチしたまちづくりの主体になりますよう期待いたします。

本冊子が校区発展の担い手になれば編集委員一同及び協力していただいた方々にとってこの上ない幸せであります。

最後に、校区史発刊に際して、ご支援ご協力を頂きました多くの方々にお礼を申し上げてご挨拶といたします。

発刊によせて

目次

第1章 自然と環境

- 1 土地のようす 7
 - (1) 位置と面積 7
 - (2) 豊橋の地形と地質 7
 - (3) 羽根井校区の地形と地質 8
- 2 気候と災害 9
 - (1) 気候 9
 - (2) 風水害 10
 - (3) 地震 11
 - (4) 災害予防 12
- 3 自然 12
 - (1) 植物 12
 - (2) 動物 14

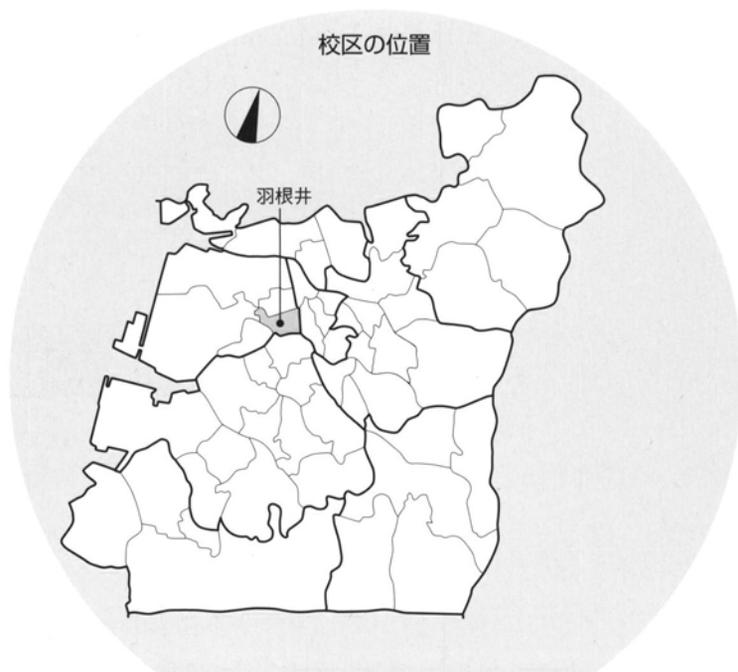
第2章 歴史と生活

- 1 羽根井校区のあゆみ 15
 - (1) 羽根井校区のむかし 15
 - (2) 江戸時代の花ヶ崎村 15
 - (3) 明治・大正の頃の羽根井校区 16
 - (4) 昭和初期の羽根井 17
 - (5) 羽根井校区の耕地整理 19
- 2 羽根井校区の昭和初期の産業 19
 - (1) 農業 19
 - (2) 商工業 20
 - (3) 戦時下の産業 21
 - (4) 戦後から昭和40年代までの産業 21
 - (5) 近年の産業 22
 - (6) 羽根井校区の交通網 23
 - (7) 鉄道網の整備 25
 - (8) 西駅前のおとぎ 27

第3章 教育と文化

- 1 幡太学校が花田尋常小学校に 28
- 2 羽根井小学校 29
 - (1) 羽根井小の誕生 29
 - (2) 羽根井小74年のあゆみ 29
 - (3) 修学旅行の移り変わり 34
- 3 羽田中学校 35
 - (1) 羽田中の誕生 35
 - (2) 羽田中60年のあゆみ 36
 - (3) 立志式のあゆみ 37
- 4 保育園 38
 - (1) 花ヶ崎保育園 38

- (2) 往完保育園 38
- 5 羽根井地区市民館 38
 - (1) 地区市民館ができる前 38
 - (2) 地区市民館の活動 39
- 6 町公民館と公共施設など 39
- 7 羽根井の社寺と史跡 40
 - (1) 素盞鳴神社 40
 - (2) 八剣神社 41
 - (3) 羽田八幡宮と牟呂八幡社 42
 - (4) 塞神社 42
 - (5) 秋葉神社 42
 - (6) 御鞆神社 42
 - (7) 忠魂碑 43
 - (8) 大法寺と宗教団体 43
 - (9) 庚申さま 43
 - (10) 羽根井念仏講ほか 43
 - (11) 大山塚の弘法さま 44
 - (12) 小栗風葉址と句碑 44
- 8 羽根井校区の活動 45
 - (1) 総代会のあゆみと活動 45
 - (2) 市総代会の発足 45
 - (3) 羽根井校区歴代総代会長 46
 - (4) 総代会の主な活動 46
 - (5) 羽根井校区の市会議員 46
 - (6) 羽根井校区自治連合体 47
 - (7) 校区各種団体の活動 47
- 年表 49
- 編集後記 52
- 参考文献 52



第1章 自然と環境

1 土地のようす

(1) 位置と面積

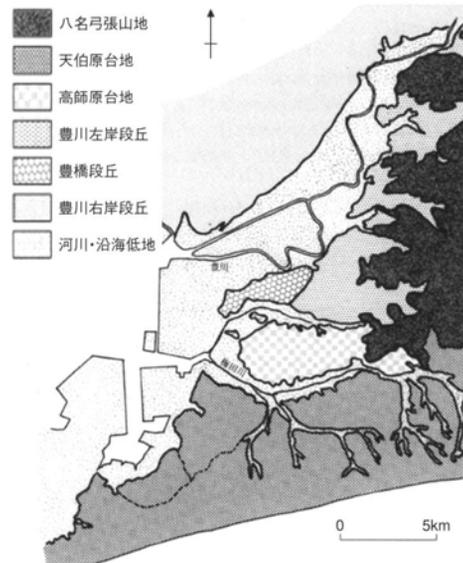
羽根井校区は、豊橋市役所の南西約2km、豊橋駅の西に隣接し、北は花田、南は福岡、東は松山、西は牟呂・汐田の各校区と接している。校区のほぼ中央に羽根井小学校が位置し、東経137°22′、北緯34°45′である。本校区は東西約1.5km、南北約1km、面積は約1.57km²である。

最高地点は白河町の白河公民館付近で海拔8.5m、最低地点は豊橋中央図書館前道路で海拔1.5m、ちなみに羽根井小学校の運動場は海拔6.8mである。また、北端には牟呂用水、南端には柳生川が東から西に流れている。

(2) 豊橋の地形と地質

豊橋の地形は、複雑に組み合わさって分布しているが、大きく山地・台地（段丘）・低地の三つに大別される。

山地 南北に連なる八名弓張山地と呼ばれる山並みが、豊川の東方、中央構造線の南東側に位置している。標高200~400mの山々が占め、石巻山もこれにあたる。この山地は、中生代（約2億5000万年前~6500万年前）の海



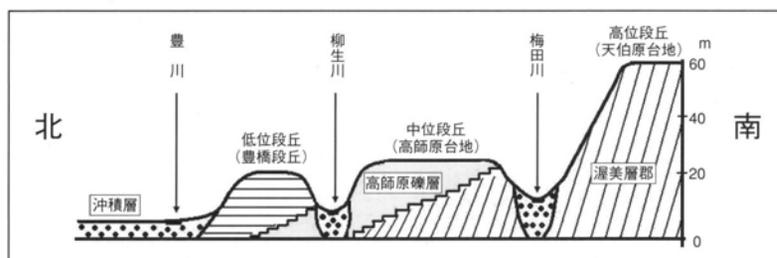
豊橋市域の地形概観図
(豊橋市自然環境保全基礎調査報告書より作成)

底堆積物が陸側に付加してできたものと考えられている。構成する岩石類は、チャート、泥岩、砂岩、石灰岩、緑色岩からなり、この地域の基盤岩類をなしている。

台地 台地は形成年代や位置により、大きく天伯原台地・高師原台地・豊川左岸段丘・豊橋段丘などに区分される。

天伯原台地は、主に渥美層群（約90万~20万年前）と言われる砂礫の堆積層からなり、高位段丘である。梅田川から南に向かって高度を上げ、海岸近くでは最高70~80mに達し、急崖で海へ落ち込む特殊な地形をしている。豊橋の台地としては一番古い台地である。

次に古いのが高師原台地と豊川左岸段丘である。高師原台地



天伯原・高師原・豊橋段丘の模式断面図 (豊川市史を参考に作成)

は、渥美層群を不整合に覆い、柳生川と梅田川の間に広がる平坦地である。豊川左岸段丘は柳生川以北に分布し、高師原台地と同じく中位段丘（標高30mほど）である。

豊橋段丘は、台地の中では一番新しく、豊川の低位段丘（標高10mほど）である。羽根井校区の北側のやや高い地域がこれにあたる。
沖積低地 今から1万年前までの完新世という時代に堆積した、最も新しい地層である。羽根井校区では、柳生川沿いの地域がこれにあたる。

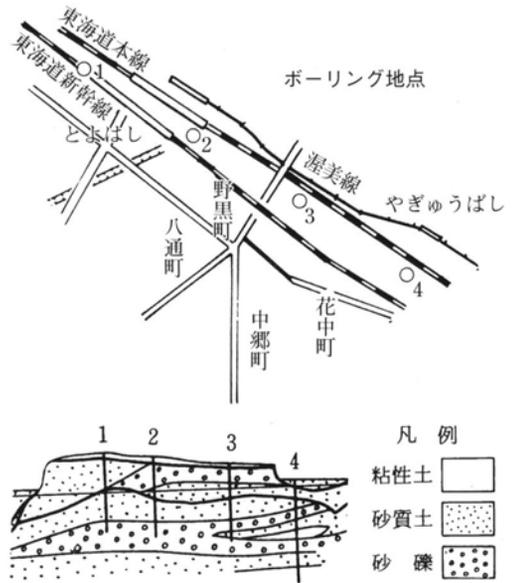
(3) 羽根井校区の地形と地質

羽根井校区の地形は、羽根井小学校を含むやや高い地域の台地（豊橋段丘）と、柳生川沿い地域の一段低い低地（沖積低地）とに大別される。

これは柳生川の方から羽根井小学校の南側の道路に向かって歩いて行くと、どこも急な上り坂になっていることからよく分かる。

羽根井校区の台地（豊橋段丘） 羽根井校区の台地は、豊橋段丘と呼ばれる。

豊橋段丘は、豊川と柳生川の間であり、豊橋市街地の主要部分も含み、台地としては一



新幹線沿いの模式断面図（東三河地区の地盤より作成）

番新しく、豊川の造った低位段丘である。

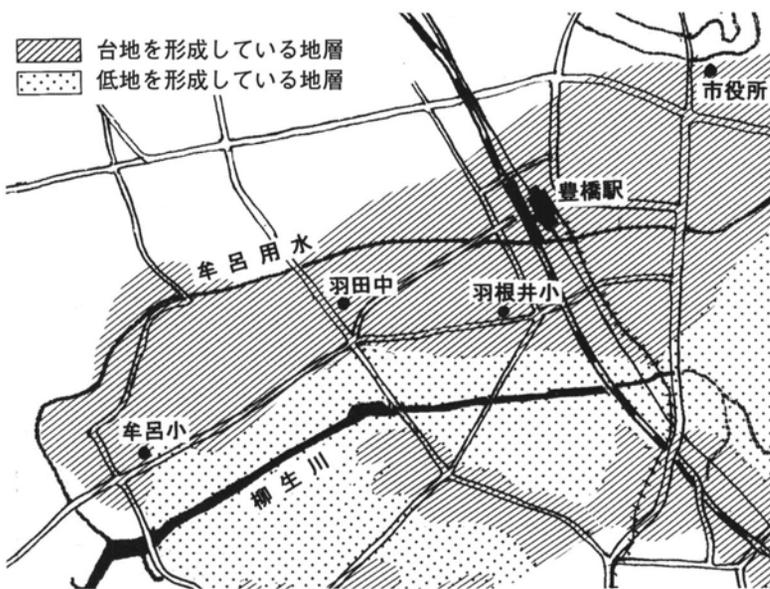
この段丘の東縁は海拔10m、西に向かって傾斜しているため、白河町では標高8mぐらい、往完町では6m、西端の牟呂町では3mぐらいになる。さらに柳生川沿いの沖積低地とは段丘崖で接している。

豊橋段丘を形成しているのは主に砂礫層で、礫は主として設楽地方に産出する流紋岩や安山岩などの扁平な中礫である。これらの礫

から、この地層は豊川によって運搬、堆積されたものであるといえる。

東海道新幹線が開通する一年前の昭和38年（1963）、建設省と愛知県は地盤調査と地質ボーリングをおこなった。

上図は豊橋駅から花中一区を結んだ地質断面図である。この断面図を見ると、部分的に粘土層や砂層が入り混じっている。このことから豊川の流れた川筋や流速、流量が時代によって変化したことがうかがえる。



羽根井校区の地質図（東三河地区の地盤より作成）

羽根井校区の低地（沖積低地）^{ちゅうせき} 羽根井校区の低地は、柳生川沿いの一段低い地域にあり、沖積低地と呼ばれる。

沖積低地は、新生代第四紀の完新世という約1万年前の時代から現在までに堆積した、最も新しい地層である。

最後の氷河期が終わり地球の気温が上昇すると、氷河の氷が融けて海面が上昇した。日本では縄文海進と言われ、約6,000年前には三河湾も奥まで海になった。小浜町の主塩貝塚の研究からも、柳生川付近が、その頃海であったことが述べられている。その後、海岸線は後退し、柳生川が砂礫・シルト・泥などを運搬堆積させ、柳生川沿いに低地が出来上がった。

愛知県地質・地盤の沖積層等厚線図を見ると、濃尾平野の沖積低地は厚いところで50mあるが、豊橋平野は15m以内、羽根井校区の沖積層は5m以内と薄い。



縄文時代の海岸線（福岡むかしと今）

今の羽根井小学校の南側は、ずっとがけになっとなあ。その下は、田んぼばかりだった。柳生運河のちょっと北側には、湧き水が出たってね。子どもの時には、よく飲みに行ったよ。そこから見ると、牟呂の八幡様がよく見えたよ。
(明治の終わりから大正の頃の古老の話)

2 気候と災害

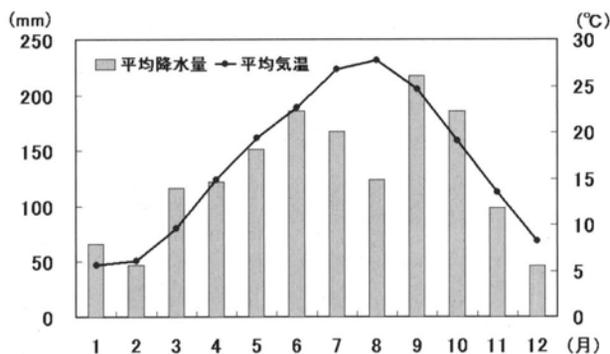
(1) 気候

豊橋市は太平洋側気候区に属し、三河山地、弓張山地に囲まれ、太平洋の黒潮の影響を受け、比較的温暖な気候である。羽根井校区の気候について、平成7年から平成16年（1995～2004）の過去10年間の豊橋市の気象データから調べてみた。

気温と降水量 過去10年間における月別平均気温と平均降水量は下図のようになった。

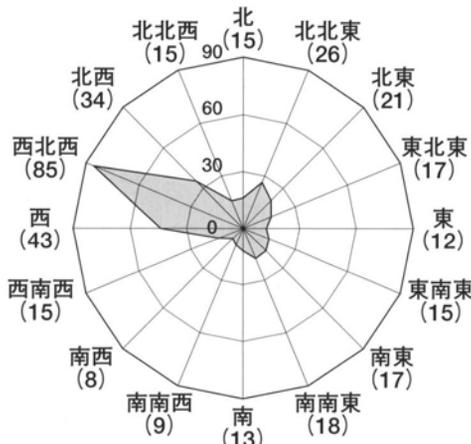
年平均気温は16.5℃、最高気温は平成13年8月の38.0℃、最低気温は平成11年2月の-4.7℃である。これは20年前の昭和62年に発行された「わが町 羽根井」のデータ（1976～1985）から比較すると、年平均気温は1℃高くなっている。また最高気温は2℃高く、最低気温も0.1℃高くなっている。これによっても地球温暖化現象がうかがえる。

平均年間降水量は1,529.1mm、平均年間降水日数は108日で、1週間に2日の割合で雨が降ることになる。また6～10月の5か月に6割の雨が降り、しかも台風による大雨や集中豪雨がこの時期にある。11～2月は降雨が少なく、降雪はほとんどないが、平成17年12月23日未明から降った雪は豊橋の交通の一部が麻痺するところもあった。

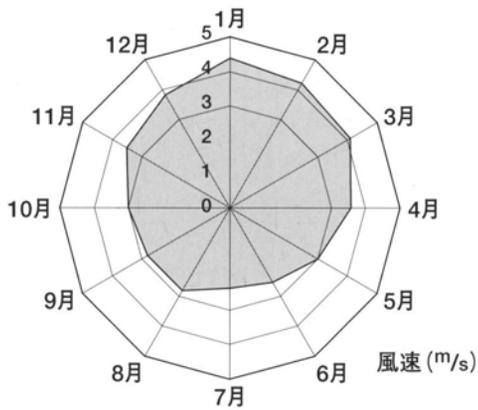


豊橋の気温と降水量（H7～H16の平均）
（豊橋市消防年報より作成）

風 過去10年間における、豊橋地方に吹く最も多い風は、西北西の風である。20年前のデータは北西の風であったが、今回は西よりの風に変わっている。風は晩秋から春先にかけてよく吹き、山越えの乾いた季節風は“三河のからっ風”と呼ばれる。夏は太平洋から湿った弱い南よりの風が吹き、蒸し暑い。



豊橋の風向別日数 (H7～H16の平均)
(豊橋市消防年報より作成)



豊橋の月別平均風速 (H7～H16の平均)
(豊橋市消防年報より作成)

(2) 風水害

愛知県災害誌によれば明治から130以上の台風が三河地方に接近した。そのうち50近くは豊橋地方に家屋の全半壊、川の決壊、橋の流失などの被害が記録されている。大きなものは13号台風と伊勢湾台風である。

13号台風 昭和28年(1953)9月25日、志摩半島に上陸、伊勢湾に入り、長野県諏訪湖方面へ去った。このため、三河地方では毎秒20～30m、伊良湖で最大瞬間風速39.9mの暴風が吹き、1時間に20～40mmの豪雨が3～4時間続いた。豊橋でも満潮と重なったため、神野新田の海岸堤防が決壊、海水が浸入し大災害となった。

羽根井校区では、高波が柳生川の堤防を乗り越え、中郷町、羽根井元町、花中二区の沖積低地に浸水した。丸織紡績工場付近(現、中央図書館)では1mぐらい浸水し、女子従業員百数十名が消防団員に背負われて、羽根井小学校へ避難した。

町名	全壊		半壊		床上浸水	
	世帯	人員	世帯	人員	世帯	人員
中郷					2	11
花中二区					5	19
元町			3	17	19	93
羽根井					2	8
立花	1	7				
往完			1	4		
八通			1	1		
計	1	7	5	22	28	131

台風13号による羽根井校区の被害状況
(台風13号による被害状況調)

伊勢湾台風 昭和34年(1959)9月26日、紀伊半島に上陸。伊勢湾の西を通過し、5,098名もの死者・行方不明者を出すという観測史上3番目の大型台風であった。伊良湖でも最大瞬間風速55.3mの暴風が吹き、豊橋で死者8名、負傷者122名、家屋の全半壊2,124戸等の被害がでた。

伊勢湾台風以降は防災体制の強化が図られ、台風などの風水害による被害は大幅に減少してきた。しかし現在、道路が舗装され雨水の浸透が減少したり、田畑が埋め立てられ宅地や工場用地になるなど、変化する社会生活に災害の形態が変わりつつある。

羽根井校区の地形から、台風や集中豪雨でもあれば、雨水が舗装道路を川となって流れ、柳生川沿いの沖積低地に集まり大水害になる

恐れもあるので、注意が必要である。

水害 最近では、平成16年（2004）10月15日、大雨洪水警報が東三河南部に発令された。豊橋市では嵩山校区全域・石巻中山町・石巻本町馬越地区に避難勧告がでた。柳生川の増水にともない、柳生川周辺地域の避難所が8箇所開設された。羽根井地区市民館にも一人が避難してきた。また、同時に梅田川周辺地域も避難所が6か所開設された。

(3) 地震

過去において、豊橋附近で被害の記録があった地震は、和銅8年（715）三河の国府地震からで、平成17年（2005）までの1,290年間に、主なものは29回である。

特に大きかったのは、東南海地震（1944）、三河地震（1945）である。最近では、愛知県東部地震（1997）で、震度5以上が観測されたのは50年振りである。

東南海地震 昭和19年（1944）12月7日午後1時36分ごろ、震源は伊良湖岬南方約60kmの海底で、マグニチュード8.0という大地震であった。愛知県下で死者438人、負傷者1,148人、家屋の全壊16,531戸、半壊25,298戸にも及び、名古屋市南部、木曾・長良川下流、矢作川、豊川下流の沖積低地での被害が目立った。

豊橋市街地の台地では壁に亀裂が入ったり、瓦の落下、石塔の倒壊などの被害であったのに対して、沖積低地である前芝町では家屋の全壊6戸、半壊40戸の被害を出している。羽根井校区の沖積低地は、当時は田畑が多かったため被害は軽微であった。

愛知県東部地震 平成9年（1997）3月16日、14時51分頃、愛知県東部を震源として、深さ40km、マグニチュード5.6、震度5弱の地震がおきた。豊橋市内では、けが人軽傷2人、一部損壊5棟であった。

羽根井校区では特に大きな被害はなかったが、中央図書館の本が棚から落ちたり、ブロック壁の一部が剥がれるなどした。

年月日	種類	概要（単位/人・戸）
明24.10.28	地震	濃尾地震:マグニチュード8.4、豊橋の震度6、渥美郡で死者3・負傷者4、
36. 7. 7~ 9	風水害	福岡村柳生川決壊、松山の過半が浸水
36. 9.23	風水害	柳生川の堤防10数m決壊
43. 8. 7~10	水害	関東、東海に豪雨、柳生川氾濫
44. 8.4	風水害	柳生川が数か所破堤
昭12. 7.13~15	水害	梅雨前線の影響、豊川をはじめ各河川氾濫
13. 8. 2~ 3	水害	2日16時~17時 33mm、柳生川氾濫
16.11.28	竜巻	大崎町で発生（橋良町→柳生町→向山町→牛川町）豊橋で死者12、重軽傷者147、家屋の全半壊347
19.12.7 (13時36分頃)	地震	東南海地震:マグニチュード8.0、豊橋の震度5~6、建物被害率1.0%、死者5・負傷者38
20. 1.13 (03時38分頃)	地震	三河地震:マグニチュード7.1、豊橋の震度5~6、建物被害率0.1%、死者1、負傷者4
28. 9.25	風水害	13号台風:暴風雨と高潮による大被害、15時過ぎ平均風速20~30m/sec、時間雨量20~40mmが3~4時間続く。豊橋では家屋の全半壊819、床上床下浸水4,077、堤防の決壊45か所
30. 5~ 7	干害	台風13号の影響が残り塩害
34. 9.26	風水害	伊勢湾台風:豊橋で死者8、負傷者122、家屋の全半壊2,124、家屋の流失1、床上床下浸水445、大崎の潮位+350mm
37. 7. 2~ 5	水害	豊橋では死者1、家屋半壊4、床上床下浸水4,687
40.12.17	雪害	豊橋では11cmの積雪
41. 7中~8下	干害	7月10日~8月10日まで10mmの雨、農作物に被害
41.10.12	水害	二つ玉低気圧による。20時~21時149mm、20時40分~50分 35mmの雨、豊橋で死者1、行方不明者8、家屋全半壊12、家屋流出1、床上床下浸水12,798、堤防決壊12か所、橋流出9か所
44. 5.17	水害	柳生町・有楽町・入船町など低湿地帯で家屋179が床下浸水、排水路が2か所破損
44.12.7	竜巻	西橋良町に発生、中郷、八通町で被害（豊橋駅東方→下地町→大村町）時速50km、死者1、重軽傷者77、住家の損傷112、被災132
46. 8.30~31	水害	31日0時~1時 39mmの雨、総雨量309mm
49. 7.7	水害	7日17時~18時 45mmの雨、総雨量199mm
平 9. 3.16 (14時51分頃)	地震	愛知県東部地震:マグニチュード5.6、軽傷者2、一部損壊5
11. 9.24	竜巻	野依町で発生（北北東へ進路→市役所東側→豊川市境界線）移動距離19km、時速45km、負傷者453、住家の損傷2,696
16.10.5	水害	柳生川周辺地域の避難所が8か所開設

豊橋地方の災害（主に羽根井校区に関するもの）
（愛知県災害誌より）

私は伊勢湾台風の際は、消防団入団5年目でした。当時26日は午前中は静かで、15時頃より急に風雨が強くなり17時頃出動命令により、羽根井第一分団は、今の羽根井ポンプ場付近の下水排水路及び柳生川堤防の警戒水防活動をしていました。翌朝校区の被害の大きさに唖然としました。以後、団員は訓練に励み、昭和44年のたつまきの時には、屋根にのぼって応急のシート張り等の救援活動を夜遅くまでしていたことを覚えています。
(中郷町：藤城行男さんの消防団入団時代の話)

東海地震・東南海地震による被害予測 過去を振り返ると、日本列島の太平洋側ではプレートの潜り込みによる地震が、100年～150年周期で起こっていることがわかっている。

豊橋市は、平成14年（2002）東海地震の地震防災対策強化地域に、また平成15年には、今世紀前半にも発生するとされている東南海・南海地震の地震防災対策推進地域に指定された。それを受けて、豊橋市は平成16年9月に地震による被害予測結果を発表した。



東海・東南海地震連動による被害予測結果
(豊橋市地震防災マップより)

(4) 災害予防

災害には、地震・津波・火災・台風・集中豪雨・洪水・竜巻・土砂災害などがあり、これらは関連しあって発生することが多い。そこで、防災を考える場合、その地域の地形・地質を理解することが重要である。

羽根井校区は、現在住宅やマンションが多く立ち並ぶ住宅街になっている。特に柳生川



柳生川洪水ハザードマップ
(豊橋市洪水ハザードマップより)

沿いの軟弱な地盤の地域では、液状化の被害や洪水の被害が心配されるため、十分な対策をする必要がある。

全家庭に、災害に備えての「防災防犯マップ・羽根井小校区（平成17年版）」「柳生川洪水ハザードマップ（平成13年版）」が配布された。羽根井校区では、地域による防災活動や街づくりに取り組んでいる。

羽根井校区の避難所		
第1避難所	羽根井地区市民館	☎32-5050
	花田校区市民館	☎31-9612
第2避難所	羽根井小学校	☎31-0375
	花田小学校	☎31-4517
	羽田中学校	☎31-3145
応急救護所	花田小学校	☎31-4517

3 自然

(1) 植物

春はヤナギの芽吹きや満開の桜。夏はクスノキの木陰。秋はイチョウの黄葉。冬はクロガネモチの赤い実。樹木の姿は、四季を告げるかけがえのない自然である。都市化の進み中で、羽根井校区には、神社や公園、街路樹に緑を見つけることができる。

素蓋鳴神社（中郷神社）の樹木 社殿の前には、3本の大木がそびえている。右からクスノキ、カナメモチ、サカキで戦前からの古木である。

大正末期まではマツが大部分を占めていたが、昭和初期の台風によって、マツの大部分が倒れてしまった。代わりに、成長も速く、害虫にも強いクスノキやサカキが植えられた。

現在マツは神社の周辺に数本残っている。他にサクラ、シダレザクラ、イチョウ、コウヤマキ、ケヤキなどがある。



中郷神社の樹木

八剣神社の樹木 やつるぎ 鳥居をくぐって左手を見るとひとときわ高いクスノキやマツなどがある。右手はイチョウ、クスノキ、コウヤマキ、スギ、サカキなどの高木が神社を囲む。社殿の前には、左右に桜の木が1本ずつある。社殿修復時に移植されたもので、春にはみごとな花を咲かせる。社殿の横手にはシイ、シラカシ、イスノキがある。秋になると地面一面にドングリが落ち、親子連れで遊ぶ姿もある。裏手には、クスノキ、カナメモチなどの高木が、社殿の格好の背景となっている。



八剣神社の樹木

羽根井公園の樹木 26本のヒマラヤスギの大木が公園をぐるりと囲んでいる。これらは昭和25年（1950）に植えられたものである。当時の市内の公園にはヒマラヤスギが多く植えられた。それは戦災復興時に大崎島あたりにヒマラヤスギの幼木が焼け残っていたこと、丈夫で育ちが速いことなどから、この木が選ばれた。昭和30年代になると、四季折々に楽



羽根井公園のヒマラヤスギ

しめる花木が植えられるようになった。現在はソメイヨシノ、トベラ、プラタナス、クスノキ、フジ、センダン、アベリアなどが公園を囲んでいる。

南羽根井公園の樹木 公園の周囲を約190本のカイズカイブキ、クスノキやケヤキの大木、トベラなどが囲む。春になると30本以上のソメイヨシノが見事に花を咲かせ、住民の憩いの場となっている。



南羽根井公園の樹木

中央図書館の樹木 図書館の周囲はカンツバキ、ハナモモ、クスノキなど色々な木々で囲まれている。春にはシダレ桜が咲き、冬はカンツバキの赤い花が美しい。



中央図書館の樹木

街路樹 校区の代表的な街路樹はプラタナス（別名スズカケノキ）である。西駅前



プラタナス

橋環状線などに多くある。冬、葉を落とした木々に大きなボンボンのような実が揺れている。イチヨウ、ナンキンハゼ、ポプラ、トウカエデ、ユリノキが高木として多い。校区で最も古い街路樹は羽根井小学校北面道路のヤナギであったが、今はアメリカフウに変わっている。最近



イチヨウ

は花を楽しめるようなコブシやハナミズキも多くなってきた。低木としてはアベリア、カンツバキ、ツツジなどが植樹されている。

(2) 動物

鳥 豊橋は日本列島のほぼ中央に位置している。渡り鳥の通過点となるため、数多くの野鳥が観察されているが、羽根井校区では、年間を通してスズメ、キジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、カワラヒワ、トビ、ハシボソガラスなどが見られる。木の実が熟す頃になると、メジロ、シジュウカラ、ウグイス、ジョウビタキなどが庭木や神社の樹木にやってくる。



コガモ

柳生川には冬鳥のハクセキレイ、コガモ、ユリカモメ、留鳥のカワウ、カルガモ、アオサギなどが見られる。

昆虫 春から夏にかけて、モンシロチョウやアゲハチョウの仲間をよく見かける。ナミア



ナミアゲハ

ゲハ、キアゲハ、クロアゲハ、アオスジアゲハである。小さなチョウのシジミチョウやセセリチョウなどもある。夏になると、どこでもセミの姿を見ることができる。7月から9月にかけて、クマゼミ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシが順番に鳴いていく。夏から秋にかけて、シオカラトンボ、アキアカネなどが飛び交う。また、トノサマバッタ、シヨウリョウバッタ、コオロギ、スズムシなどは数が少なくなっている。



シジミチョウ

柳生川の魚類 2級河川柳生川は、上流の唐沢池より殿田川、山中川、山田川、富田川などを集め渥美湾に流れ注ぐ、流路延長9.5kmの河川である。中流域が羽根井校区を流れている。平成11年豊橋市自然環境保全基礎調査によると、柳生川上流の山中川と殿田川の合流地点では、カワムツ、オイカワ、ギンブナ、モツゴ、ドジョウ、ヨシノボリ類の6種類が報告されている。平成初年までであった羽根井小学校の魚クラブが当時、柳生橋鉄橋下で採集した魚は、フナ、モロコ、ドジョウ、タウ



アオサギ

ナギ、タナゴ、ナマズ、コイなどである。また、汽水に住むセイゴ、カニ、ウナギ、ボラ、マハゼなども捕れた。今は魚クラブがないため詳しい実態はつかめないが、小池橋上流には大きなコイがたくさん泳いでいる。

第2章 歴史と生活

1 羽根井校区のあゆみ

(1) 羽根井校区のむかし

貝塚と古墳 羽根井校区に隣接する牟呂の東脇地区には、貝塚と古墳がある。東脇古墳からは、弥生土器も出土している。柳生川沿いの遺跡の発掘調査により、弥生時代に柳生川周辺の湿地帯で農耕が行われていたことが明らかになった。また、平成10年度の市内遺跡詳細分布調査で中郷町字後田にて羽根井遺跡が発見された。



羽根井遺跡の発掘調査のようす（平成10年）

古墳時代の須恵器
「はそう」

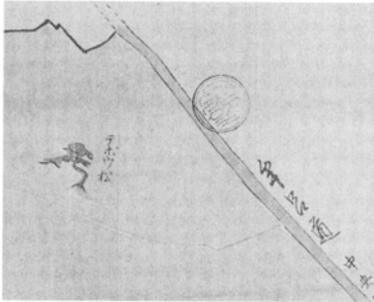
ここからは古墳時代の須恵器が出土されたり、中世から近世にかけての集落址があり、土器や陶器、磁器類などが多数出土している。場所は柳生川の河口から比較的距離があり、さらに段丘の端部分で湧水などに恵まれていることから、集落を形成する好条件の場所だったといえる。現在はスギ薬局が建っている。なお、校区内には大山塚という地名が残っている。大山塚は古墳だったという言い伝えがあるが定かではなく、江戸時代には存在していたらしいが、今は全く塚らしい所は存在しない。

花ヶ崎村の開村・鎌倉時代の羽根井 平安時代以降、公地公民制はくずれ、全国各地に荘園が作られた。やがて武士が登場し、荘園の中に郷村が生まれた。「荘園志料」によると、飽海庄の範囲を「吉田方・草間・仁連木・吉田・橋良・田尻・飯村・飽海・小浜・小池・花ヶ崎11村の汎称なり」としている。

(2) 江戸時代の花ヶ崎村

花ヶ崎村絵図 花ヶ崎村は江戸時代には開発が進み、野原は耕地に変わっていった。中郷神社に文化11年（1814）に作られた花ヶ崎村絵図が残されている。絵図に添えられた説明には、「以後、村境などで異論が出ない様、隣村の庄屋と村境を確認し合い4枚の地図を作った」、「村境には隣村の庄屋に印を押してもらい、村にある氏神へ1枚ずつ奉納した。残り1枚は村役人が預かることにした」とある。村にある三つの氏神とは、八剣神社・中郷神社・松山神社のことであるが、残念ながら現存する絵図は中郷神社に残された1枚のみとなっている。

村の南には東から西へ柳生川が流れ、その周辺には田が広がっている。集落は3つある。東から、東郷（松山）・中郷（羽根井）・西郷（羽根井）と呼ばれた。絵図には、花ヶ崎村の東はずれに1本の松が描かれている。向山の一本松といわれた松である。中郷神社から北へ向かう道を行くと、東側にまた松の絵が描かれている。これはヲヤマ塚で大山塚のこと、ヲヤマ塚の西方にもう1本ある松は手棒松である。吉田宿から牟呂村へ向かう道は



花ヶ崎村絵図の手棒松（現在の白河町あたり）

「牟呂道」と記され、花ヶ崎村と羽田村の境を通り牟呂へと伸びている。

花ヶ崎村絵図は、測量をもとにして描かれた地図である。その注釈によると、八剣神社、中郷神社、松山神社、大山塚、手棒松の5地点を現在の地図に重ね、花ヶ崎村境を現在の地図に写してみると、現在の立花町の辺りは花ヶ崎村ではなく、羽田村であり、また往完町の辺りは牟呂村であったようである。安政5年（1858）の記録では、花ヶ崎村の戸数は148軒で、男295人、女328人、合計623人となっている（「豊橋市史」より）。

（3）明治・大正の頃の羽根井校区

花ヶ崎村 明治初年頃の羽根井は、江戸期から引き続いて花ヶ崎村と呼ばれていた。当時は羽根井から松山にかけて広がる地域で、村内には35の字があった。

花ヶ崎村の中でも人家は現在の松山にあたる東郷に多く、中郷や西郷に少しあるという程度でほとんどが耕地、荒地となっていた。

行政区域の変化 明治4年（1871）7月14日の廃藩置県から明治21年（1888）4月12日の市制町村制の公布までは、近代自治制度の確立の時期と言える。中央政府からの指示により、それぞれの地域の事情を考慮することなく、行政区域が定められていった。この時期における一連の国家的な動きの中で、花ヶ崎村も行政区域が幾度か変わった。

明治4年（1871）、政府は戸籍法を制定し

た。戸籍を編成するためには、全国を区分する必要がある、大小区と呼ばれる行政区域が設けられ、大区には区長、小区には戸長が置かれ、従来の町村役人である年寄・庄屋・名主などの名称は廃止された。花ヶ崎村は愛知県第15区第1小区となった。

明治9年（1876）になり、これまでの大小区制は廃止され、変わって県内を18区に分けた制度となり、花ヶ崎村は第17区となった。区には区会所が設けられ、区長もしくは副区長のいずれかが置かれた。

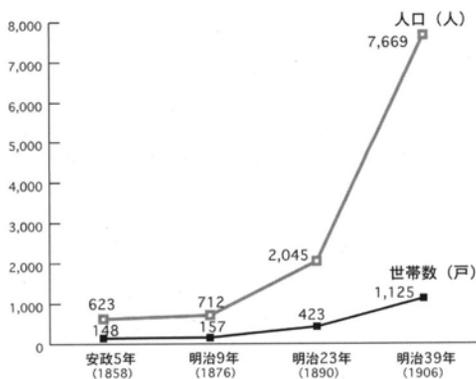
町村合併への動き 明治5年（1872）の学制発布にともなう小学校の開設や各種経費の負担などによって生じた弱小町村を整理し、町村財政を強化する必要が生じたため、明治8年（1875）頃から県下に町村合併の動きが出始めた。明治11年（1878）、政府はいわゆる三新法（郡区町村編成法・府県会規則・地方税規則）を公布した。これにより、愛知県では先の18の区が廃止され、郡・町・村が置かれることになった。

花田村の誕生 明治11年（1878）12月8日、県は大幅な町村分合を告示した。これにより、花ヶ崎村は羽田村と合併し、名前を花田村と改めた。羽田村は現在の花田・松葉校区にあたり、その村域内には19の字があった。花ヶ崎村には35の字があったので、花田村は両村合わせて54の字となった。

村の様子 花田村から政府に出された地誌「渥美郡花田村々誌」によると、村に本籍がある345戸の内訳は、士族7戸・平民338戸で、ほとんどが平民であった。平民のなかでも商人は非常に少なく、多くは農民であった。

花田村の発展 花田村は自治体としての組織を徐々に整えていった。その後、花田村の戸数・人口は増加を続け、明治23年（1890）には戸数423戸、人口2,045人（うち男966人、女1,079人）となった。

豊橋市の誕生と花田村 順調な発展をしてきた花田村は、市制施行をめぐり、施行推進派と時期尚早派は激しく対立した。明治38年(1905)、日露戦争が勝利のうちに終結したことによる国運の伸張に伴い、地方でも発展の気運が高まった。花田村は町村合併の諮問案に反対を表明した。しかし、反対意見を唱えていたのは一部の有力者だけで、一般の人々の気持ちは自分たちの村に誇りを持ちながらも、それほど強硬ではなかった。明治39年(1906)7月5日、内務省は豊橋町を市制施行地に指定し、7月15日、豊橋町・花田村・豊岡村の1町2村を廃し、その区域をもって新たに豊橋町とした。豊橋町に合併したことで、花田村は豊橋町大字花田となった。その半月後の明治39年8月1日、全国で62番目の市として豊橋市が誕生したことで花田村は豊橋市大字花田となり、さらに大正5年(1916)には、大字を町に改称し、豊橋市花田町となった。



花田村の世帯・人口推移

まちの様子と人々の暮らし 明治6年(1873)の地租改正令により、農民の負担は更に重くなり、全国では農民一揆のような激しい運動が起きていたが、羽根井校区では、江戸時代に比べ大部分の地域で租税が減ったことや主な作物であった米、麦、粟、大豆などの他にみかんや養蚕も行われていたため、それほど大きな負担とならず比較的平穏であった。

一方、明治維新後の重要輸出品となった生糸の生産に目を向けた豊橋市では、まちの中心が豊橋駅周辺に移り、羽根井校区のまちの様子も大きく変わった。製糸工場の増加により、人口が増え、八百屋や魚屋などの商店が建ち並ぶようになった。特に野黒から八通を抜けて錦町へ通じる道沿いは賑わい、現在の羽根井小学校の敷地内にも床屋、かご屋、大工、ピーナツ屋などが並んでいた。

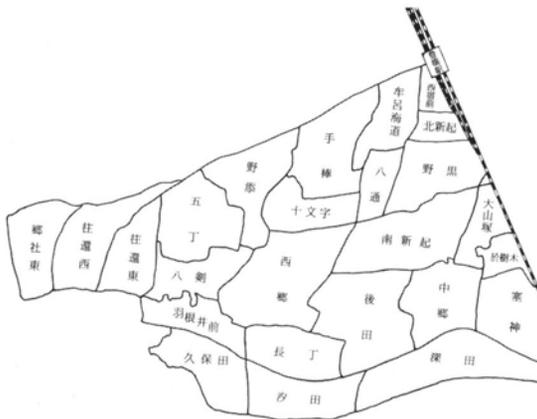
また、明治27年(1894)の電気、明治42年(1909)のガスの登場により人々の暮らしも大きく変わった。大正15年(1926)には市内で初めて札木町に街灯(電気・通称スズラン燈)が設置された。

羽根井校区では、牟呂用水「すじかい橋」の近くにあるガス会社がガス灯を立て、青い光を放ったシンボルとして人目を引いていた。

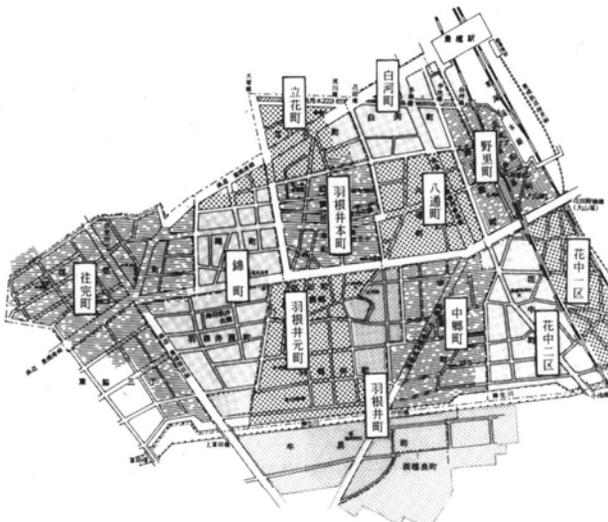
(4) 昭和初期の羽根井

町・字名の変遷 大正末期より製糸業が盛んになるに従って、羽根井の人口は急激に増加してきた。昭和元年(1926)には、羽根井・中郷・八通・野黒・立花・中央の六つの町内があったが、羽根井校区の町内組織が現在のようになり12町内になったのは、戦後になってからである。立花・野黒・八通といった豊橋駅に近い町内は、昭和初期のまま現在に至っている。昭和初期の羽根井町には、11の字があった。花田町字手棒・十文字・野添・五丁・西郷・八剣・羽根井前・長丁・後田・久保田・汐田の11字である。昭和9年(1934)、この中から、野添・五丁・八剣・羽根井前・久保田が分かれて錦町が誕生した。一方、羽根井町は、錦町を分離した後も人口増加を続け、昭和14年(1939)、世帯数増加のため、指示が末端まで伝達されるのに時間がかかり徹底を欠くようにたったため、町内運営が難しくなった羽根井町から3つの町が生まれた。

第一羽根井町・第二羽根井町・第三羽根井町である。その後、第一・第二・第三羽根井町では、昭和27年（1952）の前田耕地整理組合の解散に伴い、字区域の変更と町名の改称が行われた。これは、「町名も新しくしよう」という声が町の役職者の中から出てきたため、なかでも第一羽根井町の取り組みが早く、次第に第二・第三羽根井町の町民の関心も高まっていった。その後、第一羽根井町は昭和31年（1956）に新しく羽根井本町となり、第二羽根井町は羽根井元町、第三羽根井町は3分割される以前のままの羽根井町と決まった。一方、花中町は昭和27年（1952）の前田耕地整理により、中郷町から分かれてできた町名である。分離当時の変更区域は次のとおりである。



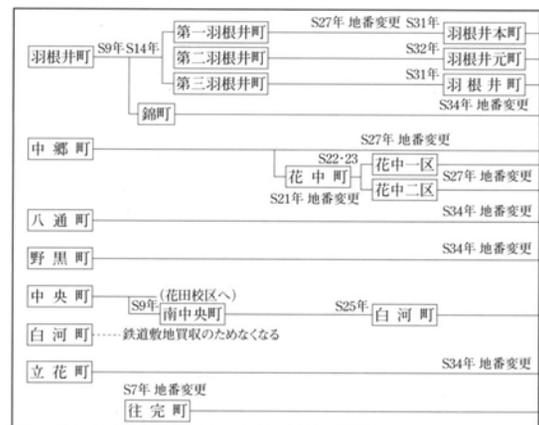
羽根井校区の字名（昭和27年）



羽根井校区の町内会（平成18年現在）

町内会の変遷 昭和初期の羽根井校区には、羽根井町、中郷町、八通町、野黒町、中央町、立花町などがあった。このうち、中郷町では昭和27年の町名変更により花中町ができて間もなく、現在の東海道新幹線を境に東を花中一區、西を花中二區と呼ぶようになり、そのまま花中一區、花中二區の町内会名となった。一方、中央町では、昭和8年の羽根井小学校新設の際、羽根井小学校と花田小学校の校区境を牟呂街道沿いとしたため、町内が二つに分かれた。牟呂用水より南側の区域を羽根井校区とし、新たに南中央町と名付けた。その後、戦後になり、花田校区へ吸収された北側の区域（中央町）が町名を花田一番町に変えたことに刺激され、南中央町も昭和25年（1950）、白河町とし、そのまま町内会名とした。なお、この白河という地名は、昭和初期に、現在の東海道新幹線の線路沿いにあった「白河」という呼び名で、鉄道敷地として買収されたためなくなった地名をもらったものである。

往完町は、前身を牟呂村字郷社東・往還西・往還東の3つの字としている。往還西と往還東の間には、昔から牟呂に通じる牟呂街道が通っていた。往還というのは、この牟呂街道を指しているものと思われる。また、郷社東というのは、牟呂八幡社の東側の地区という意味である。昭和7年（1932）、牟呂吉



羽根井校区の町内の変遷

田村は豊橋市に合併され、これに伴い、この三つの字が往完町となった。

(5) 羽根井校区の耕地整理

柳生川北域の耕地整理 大正の初めまで柳生川周辺の土地は、ほとんどが水田で、整備された用水路や排水路はなく、柳生川に自然排水されていたため、その状態は極めて不十分であった。大正6年(1917)、道路網や排水路の整備を目的に前田耕地整理事業が始まった。昭和27年(1952)8月、前田耕地整理組合は、一応の計画目標を達成して解散し、それに伴い、耕地整理区域内が次のように変更された。

<花中町へ編入>

花田町字大山塚・於樹木・塞神・深田・南新起・東郷・中郷

<羽根井町へ編入>

花田町字八剣・西郷・羽根井前・久保田・長丁・後田・汐田、牟呂町字大師孝

<中郷町へ編入>

花田町字汐田・長丁・後田・深田・中郷

<字区域の変更>

牟呂町字扇田・大師孝、花田町字西郷・南新起

牟呂八幡社周辺の耕地整理 往完町周辺は昭和初期までほとんどが畑地であったが、昭和3年(1928)、八幡耕地整理組合事業が着工された。これにより往完町の道路が整備され、現在では羽根井校区の中では最も道幅が広く、道路の狭さに困窮している中郷町や羽根井町とは対照的である。



牟呂八幡社から東方面(昭和27年頃)

戦災復興土地区画整理事業 昭和20年(1945)12月30日、「戦災地復興計画基本方針」が政府から出され、豊橋市でも昭和21年度から戦災復興に取り掛かることになった。復興事業は昭和24年度から本格的に始まり、事業執行最終年度は、昭和32年度となった。

この戦災復興土地区画整理事業により次のように町名が変更された。

<白河町>花田町字牟呂海道・北新起・野黒・手棒・十文字・八通

<野黒町>花田町字野黒・南新起

<八通町>花田町字八通・野黒・南新起・十文字・西郷

<立花町>花田町字大塚・野添・十文字・流川

<羽根井本町>花田町字手棒・十文字・西郷・五丁・野添

<錦町>花田町字五丁・野添・八剣

現在の町名と地番 昭和47年(1972)7月、花田町字八剣・西郷、往完町字往還東、牟呂町字坂下・大師孝の区域が新たに羽根井西町となった。このことにより、昭和7年の往完町の八幡耕地整理に始まり、昭和27年の花中町・羽根井町・中郷町の前田耕地整理、昭和34年の戦災復興土地区画整理と続いた羽根井校区の町区域の変遷が一段落した。ただし、八剣神社周辺の区域は戦災復興土地区画整理区域からはずれていたため、地番は花田町字西郷のまま現在に至っている。また、羽根井西町は、現在の町内会組織としては錦町・往完町に区分されている。

2 羽根井校区の昭和初期の産業

(1) 農業

明治初期は世の中が大きく変わった時期であった。当時の人々の生活に、最も大きな影響を与えたのは、明治6年(1873)の地租改正であった。当時の農作物は、米・大麦・小麦・粟・大豆などであったが、羽根井校区で

はみかんの栽培や養蚕も行われていたため、地租改正による影響も、それほど大きな負担とならなかったようである。

みかんの栽培 羽根井のみかんの栽培は江戸時代から行われており、羽田みかんとして知られていた。みかん畑は、現在の羽根井本町・元町周辺に広がり、人々はそのあたりを「みかん屋敷」と呼んでいた。しかし、明治後期に入り製糸が盛んになるにつれ、みかん栽培は衰退していった。製糸工場から出る煤煙による栽培困難と製糸工場に土地を貸す方が収益がよいということも衰退の一因であった。

羽根井小学校付近では、明治の終わりから大正にかけて、現在の羽根井町・元町・中郷町のあたりは古くからの農家が10数軒あるだけで他は竹やぶと田であった。現在の羽根井西町には民家はほとんどなく、田ばかりであった。また、現在の往完町郷社東・往還西のあたりも畑ばかりで、民家は全く見られなかった。

(2) 商工業

羽根井校区の商工業を語るうえで、製糸業は省くことはできない。江戸時代から明治時代になり、政府は富国強兵策を進めるため、殖産興業として、製糸業の育成に力を入れ始めた。豊橋でも製糸業の重要さに着目した多くの先駆者が現れ、桑の苗を農民に与え、蚕種（卵）の飼育を始めた。繭の生産が始まると製糸場を創設した。

製糸工場 明治初期の羽田や松山の集落には人家もなく、畑や林、荒地であった。この畑地に製糸工場が建ち始めたのは、明治20年代になってからである。日清戦争後の好景気の中で次々と製糸工場が花田村（現在の羽根井・花田校区）で創業を始めた。明治37年（1904）から45年（1912）は、この地区に製糸工場が建ち続け、その数は38工場にもなっ



丸上製糸事務所（現丸上製作所／羽根井本町）

た。大正3年（1914）から大正8年（1919）までの6年間で蚕糸業の生産額は10倍以上に急増し、蚕糸業の生産額は豊橋の工業生産額の82.2%を占めた。昭和8年（1933）、羽根井には約100の製糸工場があった。田畑が工場となり、街となった羽根井。そこでは数多くの製糸工場が生糸や玉糸の生産を行っていた。

製糸工場は野黒町・八通町・白河町・立花町に集中し、羽根井本町・錦町・中郷町にも散在していた。玉糸工場は30ほどあり、生糸工場より少なかったが大きな工場が多かった。**養蚕業** 羽根井には多くの桑畑があった。当時、花田町字西郷には数軒の農家が点在していて、稲作を中心に養蚕・みかん栽培を行っていた。養蚕は現金収入の少ない当時の農家にとって、まとまった現金が得られる副業として歓迎された。

ドッチ処理場 繭から糸を採った残りをドッチという。製糸工場からは毎日、多量のドッチが排出された。このドッチを回収し、少量の絹糸（ビス）とさなぎに分けるのがドッチ処理場である。羽根井には、八通町に3軒のドッチ処理工場があった。

昭和10年代には、ドッチ工場の到る所にドッチが干してあった。それに付着しているさなぎを好餌とする鳶が、常に空を舞っていた。

（八通町の白井たつ子さんの思い出）

繭問屋 豊橋には200余の製糸工場があり、そこで生産される糸は膨大な量であった。昭和7年(1932)の「郷土の産業」によると豊橋には本町・萱町を中心に49の繭問屋があった。特に玉糸工場が多かったため、豊橋市は全国唯一の玉繭集積地として脚光を浴びていた。

うなぎ問屋 羽根井校区には現在も3軒のうなぎ問屋があり、戦前、豊橋で養鰻が盛んだった面影をとどめている。生糸・玉糸を作り出す際に出るさなぎは、うなぎの餌として大量にかつ安価に入手することができた。

製糸機械製造業 製糸工場の多い羽根井校区では製糸機械の需要も多かった。八通町や火花町をはじめ、校区内には数件の製糸機械製造業者がいた。

再製絹糸業 再製絹糸業とは、アメリカから穴のあいたストッキングを輸入して、解きほぐし、絹糸に再製する産業をいう。羽根井校区にも中郷町・羽根井町・錦町・野黒町などに多くの再製絹糸業者がいて、昭和10年頃には全国一の産地となっていた。

(3) 戦時下の産業

製糸業の衰退 豊橋市の蚕糸業生産額が前年より50万円以上減った年が大正8年(1919)から昭和10年(1935)の間に4回もある。大正9年(1920)、昭和5年、6年、9年である。大正9年には生糸相場は大暴落し、糸価が前年の3分1ほどになった。極度の輸出不振により生糸の滞貨が急増したための不況であった。これらの不況を乗り切るために製糸工場では、休業や釜の封印などを行い、工場から煙の昇らない日々が続いた。

製糸工場の減少 豊橋市では昭和12年(1937)の業界自主整理前には、239工場あった生糸工場が昭和18年(1943)の工場整理後には、わずか4工場になってしまった。玉糸工場も36あった業者のうち、19業者が転・廃業した。

蚕都豊橋の中心地として栄えた羽根井校区でも製糸工場が一つひとつ消えて、昭和20年(1945)の空襲を待たず糸の町ではなくなっていったのである。昭和12年(1937)、日中戦争が始まると国は経済統制を強め、戦時を支える経済へと移行していった。電力・石炭などの物資は軍需産業に集中的に流され、製糸業は三次にわたる企業整理を行った。羽根井校区の製糸工場の多くは、昭和17年(1942)の第二次工場整理の時に姿を消した。昭和18年(1943)、統制会社日本蚕糸製造株式会社が設立され、生糸4工場が吸収、他の製糸工場は軍需工場に転換するなど、転・廃業が多くなった。

軍需工場 昭和14年(1939)、豊川海軍工廠が完成し、その頃から豊橋の工業の中心は、軍需産業が占めるようになった。羽根井にも次のような軍需工場があった。昭和14年(1939)、花田町手棒(現成田記念病院・駐車場付近)に機関銃製造の大日本兵器が設立された。続く、昭和15年(1940)には、花田町久保田(現中央図書館付近)に航空機部品・艦載工作機を製造する豊橋精機が設立、昭和18年(1943)には、花田町手棒の丸上製作所が製糸工場から軍需工場に転換し、機銃のばねの製造を開始、昭和19年(1944)、花田町字八通(現成田明陽苑付近)にあった氷砂糖製造の旭冰糖商会在旭航空兵器と社名を変更して軍需工場に転換し、航空機部品を製造し始めた。また、明治42年(1909)設立した豊橋瓦斯は豊川海軍工廠へのガスを供給することとなった。その後、豊橋瓦斯は昭和18年(1943)に浜松瓦斯と合併し「中部瓦斯株式会社」となった。

(4) 戦後から昭和40年代までの産業

戦後の羽根井校区の産業を特徴付けたのは、食料品工業と金属機械工業であった。戦後に

においても、鉄道駅周辺という立地は、工場進出の重要な要因であって、羽根井が豊橋市の工業地区において重要な位置を占めていたことは、戦前と同じであった。

繊維・紡績業 製糸業は衰退してしまっただが、戦後、繊維業が興った。昭和23年（1948）には、丸織紡績が豊橋精機の工場跡地に移転してきた。他に手袋・前掛けの製造やナイロン・合成繊維の再生を行う業者が21工場あった。中郷町の白井産業は昭和20年（1945）の設立で、昭和25年（1950）頃から魚網製造から紡績と手袋製造に切り替えた。

食品工業 昭和22年（1947）、大日本兵器の工場跡地に水鳥製菓、昭和26年（1951）に柴



西駅前ガスタンク（昭和50年）

田製糸工場跡地（現積水ハウス・NDSマンション付近）に光陽製菓のゼリー工場2社が移転してきた。昭和40年頃には水鳥製菓・光陽製菓・松井製菓・ミトヨ製菓・中川製菓・丸三製菓・松葉屋製菓などの大きな工場のほか多くの菓子製造があり、食品工業は、戦後の羽根井校区を代表する産業であった。

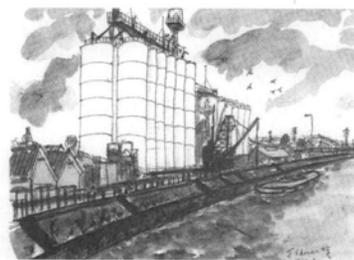
穀物・飼料工場 柳生運河沿いには、昭和13年（1938）に移転してきた豊橋飼料を始め、ユタカ産業・内山製麦・豊橋糧食工業などの穀物・飼料工場があり、昭和40年代頃までは、これらの工場へ原料を運ぶ船で柳生運河は賑わっていた。

金属・機械工業 羽根井には17の鉄工所・鋳造所があり（機械製造の鉄工場を除く）、そのうち10工場は往完町・錦町・羽根井町にあった。従業員30人以上の工場は、山本鋳造

所・協和メッキ工業・田中工業所・中央鋳造所・島工芸社の5社であった。

機械製造業 羽根井には数多くの機械製造工場があった。従業員30人以上の工場は旭精機・丸上製作所・深見工業・山内鉄工・野口製作・サイゴンミシン製作・高津精工・協栄鉄工の8社である。

その他の産業 従業員30人以上の企業は、中部ガスグループ・壺屋弁当部・丸新精工・豊浜工業・協和工業・兄弟建設工務・本州木材工業・愛金建設・水口紙函工業・中部電通社などである。



豊橋飼料（昭和54年）

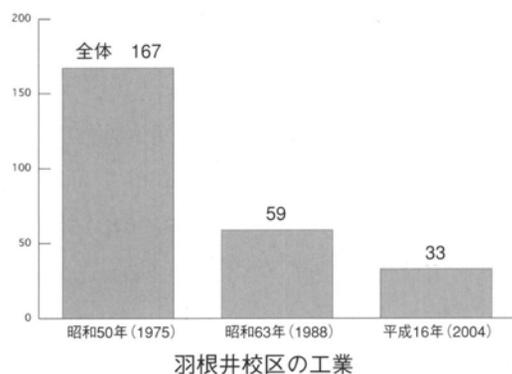
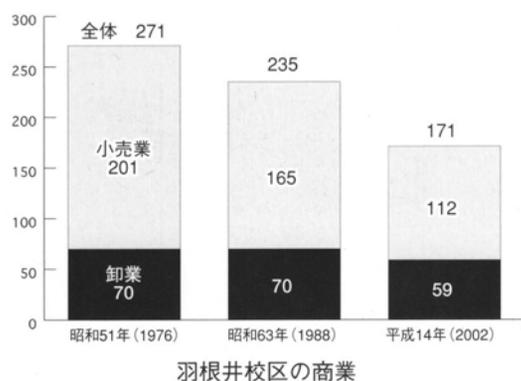
(5) 近年の産業

近年、運輸の事情は急速な道路網の整備が進むにつれ、貨物輸送は、鉄道からトラック輸送に取って代わり、羽根井校区の有利さは次第に薄れてきた。昭和39年（1964）の東海道新幹線の開業に伴い、白河町周辺の駅西地区の再開発が進み、併せて豊橋港の開港、明海地区産業基地が、昭和48年（1973）に造成完了し、豊橋港や明海地区に通ずる道路網も整備されて、羽根井の産業は大きく変わっていった。



スポーツ広場と中央図書館（平成18年）

昭和57年、白河町の水鳥製菓は明海町に移転し、その跡地に成田記念病院が拡張建設され、また、白河町の西駅前交差点南西角地に損保ジャパンビルが建ち、八通町の旭精機は賀茂町に移転し、その跡地に老人保険施設「明陽苑」が建てられた。一宮町（豊川市と合併）に移転した光陽製菓跡には、積水ハウスや高層マンションが建設され、撤退した丸織紡績の跡地には、豊橋市中央図書館やマンションが建ち、スポーツ広場も整備された。また、中郷町の交差点には、日本興亜損保ビルが建つなど、羽根井校区の産業地図は、戦前と大きく様変わりした。



柳生運河沿いの豊橋飼料も、明海産業基地に移り、跡地には、食品スーパー「フランテ」やホームセンター「カーマ」やおもちゃ販売の「トイザラス」、「やすい家具」などが進出し、かつての工場地帯が商業地区に一変してしまった。

(6) 羽根井校区の交通網

明治時代から大正時代にかけて、幹線道路と言えるのは、豊橋町から牟呂吉田村の市場へ抜ける牟呂街道のみであった。羽根井校区の人々にとっては、旧花田小学校から南へ延びる道路と大山塚の踏切を中郷神社へ抜ける道路が豊橋市街地への主要道路であった。その後、花中町の塞神踏切から羽根井の南側を通る道も活用されるようになった。明治から大正にかけて、大山塚の踏切から八通町、羽根井本町では繁華街が形成されていった。昭和7年(1932)になり、牟呂バスが羽根井本町の通りを走るようになった。昭和に入ってから、往完町や牟呂方面の人たちは牟呂街道から現在の花田小学校横を北に抜け、城海津の踏切を通ることが多くなった。

人力車と輪タク 明治から昭和にかけて、羽根井校区の人々も人力車を利用した。明治44年(1911)4月には、豊橋市内に285台の人力車があった。昭和12(1937)～13年(1938)は、まだ人力車も健在であった。自転車の横に客を乗せるための幌をつけた輪タクが登場したのは、昭和16年(1941)頃で、輪タクは人力車とともに終戦後も庶民の足として使われた。



駅前で客を待つ人力車の写真

犬と大八車で運ばれた石炭と繭 羽根井・花田校区の製糸工場では、燃料として石炭を使用しており、石炭は関屋町の豊川河岸に揚げられたものを、大八車で運んでいた。これらの車には犬が、主人と一緒に車をひい

ていた。この石炭と繭を運ぶ風景は、昭和になっても、太平洋戦争が始まるまで見る事ができた。

タクシーの登場 大正に入ると豊橋にもタクシーが現れた。タクシーは製糸の女工さんたちが帰省するのにも使われた。昭和8年(1933)のタクシー運賃は、駅から羽根井町・往完町辺りまで50銭くらいであった。

牟呂バスの営業開始 「牟呂吉田村誌」によると、昭和元年(1926)12月29日に牟呂豊橋間の定期自動車(通称：牟呂バス)が運行を開始した。牟呂バス路線は大手通の福井自動車商會が運営し、牟呂市場の谷山氏宅前から現在の東脇、往完町の杉原新聞店、羽根井本町を通過して大山塚の踏切・線路を渡り、小田



牟呂バスの写真(昭和11年)

原(現加藤病院)で左折、本町、公会堂前という経路であった。当時、バス停は往完町の交差点と市場入口の菓子屋前の2か所だけで、客の希望でどこでも乗り降りできた。昭和8年(1933)頃は、市場から公会堂まで40分くらいかかった。昭和11年(1936)1月からバスの本数も増え、一日8回運行するようになった。昭和12年(1937)頃になり、福井自動車はタチバナバスに牟呂バス路線を売却し、バスの終点は豊橋駅となった。

ガソリン不足と木炭車 昭和13年(1938)頃から、羽根井を走るバスはもちろん、民間の自動車はほとんど木炭車に変わり、軍用車だけがガソリンで走っていた。

都市計画街路 第一次世界大戦により、都市

としての発展の機を得た豊橋は、大正12年(1923)、都市計画法が適用された。羽根井校区を通る三本の幹線道路は、都市計画の中で中郷町から白河町を通過している県道大山豊橋停車場線と中郷町と往完町を結ぶ市道大国町往完町1号線は昭和3年(1928)に、白河町から往完町を抜けて牟呂に至る県道豊橋港線は昭和21年(1946)に都市計画道路として指定された。これらの道路は、中郷町、白河町、往完町を相互に結び、三角形を作っている。太平洋戦争により壊滅的な被害を受けた豊橋では、昭和20年(1945)9月、豊橋市復興委員会が組織された。羽根井校区の三本の道路は、現在の県道大山豊橋停車場線が復興都市計画街路125号線に、県道豊橋港線は123号線に、市道大国町往完町1号線は133号線に指定され、現在の羽根井校区内の道路網は完成へと進んでいったのである。



県道豊橋港線・花田小学校南(平成18年)

花田跨線橋 大山塚・城海津両踏切を中心とする豊橋市の都市計画街路網築造第一期事業は、昭和7年(1932)から9年(1934)の3年継続事業として着工された。花田跨線橋



花田跨線橋(昭和51年)

(羽根井・松山校区を結ぶ)の着工は昭和9年(1934)8月であった。昭和10年(1935)6月25日、舗装工事を残すのみとなった花田跨線橋の渡橋式が盛大に行われた。羽根井・松山両小学校の6年生児童代表も渡り初めに参加した。

大山塚(野黒)の人道橋 戦前より羽根井の人たちは花田の跨線橋や大山塚の踏切を通り駅前へ出ていた。昭和28年(1953)、佐久間ダムの工事が始まり、国鉄は資材輸送力の増強を図るため、豊橋駅の操車場を拡張する計画があった。しかし、貨物駅の機能を強化する上で大山塚の踏切とそれに付随している人道橋が大きなネックとなっていた。国鉄は地元住民の強い要望を受け、新しく人道橋を建設することを条件に昭和29年(1954)11月21日、長い間羽根井の人々に親しまれてきた大山塚踏切を閉鎖した。人道橋工事の着手は同年12月16日である。工事は翌30年(1955)5月末完成し、見通しが悪く事故の多かった塞神の第一踏切も大山塚踏切と同時に閉鎖された。

柳生川 昭和初期までの柳生川は、川幅が1.8メートル程度の曲がりくねった小さな川で、大雨が降ると川が氾濫することもしばしばで中郷付近まで水浸しになることもあり、そのような時にも自然に水が引くのを待つしかなかった。昭和4年(1929)頃から牟呂・前田・高師の三耕地整理組合により、柳生川鉄橋から下流、牟呂港樋門に至る間の柳生川運河開さくが計画された。昭和5年(1930)



大山塚の人道橋・西小田原町側(平成18年)

に工事計画は拡大され、柳生川鉄橋から下流約7.2キロメートルの川幅を36メートル、水深2.4メートルにすることになった。昭和6年(1931)5月、柳生運河の工事施工が認可され、昭和8年1月に着工され、昭和11年3月28日、竣工式が行われた。竣工後、石炭などを運ぶ船が出入りし、運河としての役目を果たし始めた。昭和12年(1937)頃から柳生川沿いに工場が立ち並び始めた。ユタカ産



柳生川・汐田橋から上流方面(平成18年)

業・豊橋飼料(丸ト飼料)なども運河を利用した工場である。油脂原料や飼料原料の米ぬか、穀類や燃料用の石炭を荷揚げしていた。その後、昭和28年(1953)9月の台風13号により、堤防が決壊し大きな被害を出したため、堤防が改修された。新しい堤防は、昭和34年(1959)の伊勢湾台風にもびくともせず、現在も残っている。

運河沿いの繊維業の衰退により、運河沿いの工場は姿を消し、戦後運河を利用していた丸ト飼料も後に明海産業基地に移転し、羽根井地区での運河沿いで、運河を利用している工場は皆無となった。

(7) 鉄道網の整備

豊橋駅が開業したのは、明治21年(1888)9月1日、東海道本線の開通と同時であった。当時、一般の人々は鉄道の真価を理解できず、やむなく市街地を離れた羽田村の畑地に駅を設けることになった。その後、豊橋駅の発展

に刺激されて、東三河一円の鉄道網は着々と張り巡らされ、明治30年（1897）豊川鉄道営業開始、大正12年（1923）鳳来寺鉄道営業開始、大正13年（1924）渥美電鉄高師田原間開通、大正14年（1925）豊橋電気軌道駅前札木・柳生橋間開通、昭和2年（1927）愛知電鉄吉田駅乗り入れ、渥美電鉄豊橋駅乗り入れと続いた。

昭和2年（1927）、豊橋駅西口開設を要望する署名運動が線路以西の各町で行われ、昭和4年（1929）4月21日、豊橋駅西口（西駅）が開業した。これで線路以西の住民は列車に乗るために本駅まで歩く必要も、踏切で長時間待つこともなくなったのである。西駅の開業に続き、昭和11年（1936）12月には二俣線が開通、昭和18年（1943）には伊奈・三信・鳳来寺・豊川鉄道を買収して国鉄飯田線として営業を開始した。当時、西駅周辺には大小の製糸工場があり、原料や製品の運搬や女子工員の帰省などにも列車が利用され、活気にあふれていた。

渥美電鉄の開業 大正14年（1925）5月、花田・田原間が開通した。当時の花田駅は現在の野黒人道橋の北側に位置し、その後、昭和2年（1927）に線路を延伸し、花田・新豊橋間が開通し、戦後、現在の新豊橋駅の場所に落ち着いた。

弾丸列車計画 戦前にさかのぼる昭和15年（1940）に弾丸列車計画が立てられ、東京・下関間を弾丸列車で結ぼうとするものであった。昭和16年（1941）より用地買収が始まり、羽根井校区に熱海の工事局から買収の話が持ち込まれたのは昭和17年（1942）であった。しかし、戦争が拡大し、計画は白紙になった。

豊橋駅の復興 昭和20年（1945）6月20日深夜、空襲によって豊橋の交通機関は一夜にして壊滅した。しかし、戦後の急ピッチの復興により、昭和21年（1946）3月20日、バラッ

ク建てではあったが、駅が完成し、同年10月21日、全国ご巡幸の天皇陛下を迎えた。



豊橋駅前（昭和39年）

新幹線構想 昭和31年（1956）5月、国鉄は「東海道線増強調査会」を設置して、新幹線計画をスタートさせた。豊橋では弾丸列車用地として買収済みで、その後農地として耕作していた元地主に対し、昭和34年（1959）4月から買収済みの農地の返還交渉が始まった。**新幹線建設と西駅新設工事** 昭和35年（1960）12月9日、新幹線工事鍬入式が行われた。豊橋駅の建設には高架式・地平式・地下式の三案があり、検討の結果、工事のし易さと経済性から地平式が選ばれた。

昭和37年（1962）12月27日西口階上駅着工、同38年（1963）8月西口階上駅使用開始、同38年11月新幹線上下本線敷設、同39年（1964）7月新幹線レール全通、同39年8月新幹線ホーム上屋完成と工事は着々と進められ、昭和39年（1964）10月、歴史的な東海道新幹線の全線営業開始の日を迎えた。



新幹線開通（昭和39年）

豊橋駅地下道の開通 羽根井・花田校区では豊橋駅の完成以来、線路によって市の中心部と東西に分断されてきた。昭和37年（1962）11月、豊橋市長から名古屋幹線工事局長あてに地下道建設についての陳情書が出され、建設計画は順調に進んだ。昭和38年（1963）、第1期工事として新幹線下が着工、昭和45年（1970）、第2期工事としてステーションビル下が完成し、昭和44年（1969）、第3期工事として二俣線下が着工された。昭和46年（1971）2月、難工事の末、延長228メートル、幅3メートルの豊橋駅東西連絡地下道が完成、3月6日に開通式が行われた。これまでは、城津跨線橋を通ると20分かかるため、入場券を買い駅構内を近道していたのが、ゆっくり歩いても4分くらいで東口に出られるようになって、地元の人々は大喜びした。



西駅側からの地下道（昭和46年）

(8) 西駅前の昔と今

西駅開業当時は、人々が鉄道を利用する機会はまだまだ少なかった。そのため、西駅開業により西駅前が急発展することはなかった。戦後は、鉄道利用者も増え、西駅付近も利用者相手の飲食店などの商売が発展していった。昭和39年（1964）10月1日、東海道新幹線が開業し、豊橋駅にも「こだま」・「ひかり」が停車するようになり、西駅を利用する乗降客が急速に増えてきた。昭和62年（1987）4月1日、国鉄は分割民営化され、本州ではJR

東日本・JR東海・JR西日本の3社、その他の地域ではJR北海道・JR九州・JR四国とJR貨物にそれぞれ分割され、営業を開始した。平成8年（1996）9月、豊橋駅新駅ビルが竣工し、同年9月16日、東西連絡通路の共用が開始された。西駅側にはエスカレーターも設置され、駅構内にはホテルアソシア、カルミア商店街も開業した。生鮮食料品・衣料品・食堂などの店も営業を始め、鉄道乗降客だけでなく駅西の羽根井校区の人達も利用するようになった。平成9年（1997）3月31日をもって、昭和46年（1971）以来26年間にわたり親しまれてきた東西連絡地下道も廃止され、埋め立てられることになり、新駅ビルの連絡通路を利用することとなった。新しい西駅前には、タクシーの乗降場や豊橋鉄道のバス「牟呂線」・「神野埠頭線」の2系統のバス発着場、ホテル日航のシャトルバスの停留所もあり、白河町地内の白河橋脇には市営の駐輪場もできた。新幹線の改札口が駅の西口側にあることもあって、早朝から深夜まで西駅周辺は賑わいを見せている。



豊橋駅西口のようにす（上）と西駅（下）（平成18年）

第3章 教育と文化

1 幡太学校が花田尋常小学校に

学制発布と幡太学校 明治5年(1872)8月3日、「必ず^{むら}邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめんことを期す」で始まる学制が発布された。

この学制により全国は八つの大学区に分けられ、大学区の中に中学区が、そして、中学区の中に小学区が置かれた。こうして花ヶ崎村は第十中学区第四小学区となり、初めての公立小学校である幡太学校が設立された。当時は、学校といっても民家や寺院の一角を間借りすることがほとんどであった。この幡太学校も例外ではなく浄慈院(羽田八幡宮南西)の本堂が教室に充てられた。



浄慈院本堂

この幡太学校設立の様子は、浄慈院住職山澄覚禅師が書かれた「多聞山日誌」に詳しく記されている。それによると、花ヶ崎村の正林寺(現在の松山校区)も浄慈院と同様に村方学校として届出をしていたこと、花ヶ崎、羽田両村の世話役3人が学校づくりに走り回っていたことが書かれている。明治6年10月15日、開校当日は朝早くから多くの村人が手伝いに集まった。花ヶ崎、羽田両村の村長、

年度	移り変わり
明6 (1873)	幡太学校は10月15日開校 児童は約70名
7	4月1日長全寺に移転
8	渥美郡として校舎を長全寺境内に新築
13	第11番小学校として分離開校
17	第11番小学校は花ヶ崎学校となる
18	花ヶ崎学校は花田村字中郷95番地(現在の中郷神社北側辺り)に校舎新築
20	花ヶ崎学校は幡太学校とともに渥美郡尋常小学・三吉野学校(現在の吉田方小学校)の分校となる
22	幡太学校と合併、校舎は花田村字西宿前42の49に新築移転。現在のウエステージの南側辺り、校舎と校庭は牟呂用水をはさんで分かれていた
25	幡太学校は三吉野学校から分離し、花田村立花田尋常小学校となる
26	高等科を併設し、花田尋常高等小学校となる
40	市制施行の翌年、豊橋市立花田尋常高等小学校と改称 その後、高等科が八町小学校に移り再び花田尋常小学校となる

組長らもお祝いに駆けつけ赤飯や祝儀が出された。こうして幡太学校はスタートした。

激増する花田小児童 大正も後半になると、豊橋は次第に製糸の町としての色彩を帯び始めてきた。

羽根井を含む花田地区には、いくつもの製糸工場が建ち始めた。それに伴って、花田地区の

学校名	大正元年	昭和6年	平成18年
高等科	549人	1137人	—
岩田小	375	621	985人
東田小	427	1069	471
八町小	1109	1340	186
新川小	1080	1896	293
狭間小	814	1123	—
松山小	507	1179	298
松葉小	946	1552	356
花田小	367	1947	407
羽根井小	—	—	471

人口は増加の一途をたどった。花田尋常小学校の児童数も、大正元年（1911）の367名が昭和6年（1931）には1,947名を数え、市内の小学校の中で最多の児童数となった。

2 羽根井小学校

(1) 羽根井小の誕生

花田小の児童数増加に伴い新しい学校設立の気運が高まった。地域の人々の熱意をくんで、市は学校新設を決定した。花田小との校区割りは、①牟呂用水を境に南北に分ける案と②西駅前から往完町に抜ける道を境に東西に分ける案とが検討され、結果は②案に決まった。新設校の候補地として現在地が決定したのは羽根井校区の中心道路（現羽根井小と羽根井公園の間の道）に面していたこと、校区のほぼ中心地であったことの二つの理由からである。当時、建設用地には、10軒ほどの民家があったが、移動や転居していただいた。



羽根井小の校章

校章は、輝く日本の大空へ大きく羽ばたく羽根井の子どもになろうとの精神が表現されたものである。

(2) 羽根井小74年のあゆみ

① 昭和8年（1933）～昭和17年（1942）

年度	児童数	主なできごと
8	1,007	羽根井尋常小学校創立開校 羽根井・花田両校決別式 校章の制定 初代校長 榑原喜久治
9	1,007	開校祝賀校区大運動会 校旗・校歌制定
10	1,248	二宮金次郎像建立 第2代校長 小野義郎
12	1,377	楽隊の設置 出征兵士を送る 第3代校長 内藤甚太郎
15	1,562	皇紀2600年奉祝大運動会
16	1,570	羽根井国民学校と改称 第4代校長 鈴木 潔
17	1,561	創立10周年＝記念式典 物故職員・児童の慰霊祭

羽根井小と花田小児童の決別式 昭和8年4月1日、羽根井尋常小学校が開校し、4月6日に羽根井、花田両校の分離式が行われた。しかし、6月末までは花田小学校に間借りをしていた。7月1日に羽根井小の西校舎が完成し、羽根井小児童と花田小児童の決別式が行われた。校門のところで花田小の友達や先生が手を振って見送った。高学年は羽根井小まで机や椅子をかついで運んだ。



入口が3つあった旧校舎の玄関

73年前の思い出

開校当時、新1年生として入学した私たちは、隣接の花田小学校に間借りして勉強していました。その当時、鉄筋コンクリート3階建ての小学校は、市内には新川小学校の他にはありませんでした。屋上に上がると、西には、三河湾が日に輝き、東は、石巻山、本宮山、赤岩など弓張りの山々が目に迫り、その眺望の雄大さは「日本一の小学校、日本一の子ども」をモットーに、新しい校風を創り出そうという、羽根井小学校の職員、児童の意気込みそのものでありました。

校舎3階の中央部にあった修養室での静座や瞑想、冬季屋上での冷水摩擦の励行、市内小学校児童競書会に備えての連日暗くなるまでの猛練習、郷土室での校区戦没者の遺影遺品の整理と展示、四季の式典、剣道の稽古、七夕祭り、映画祭、学校農園での農作物の収穫、ウサギの飼育と土に親しみ額に汗した毎日、農作物をリヤカーや大八車にのせて校区をまわり、皆さんに買っていただいたこと、等々の思い出は73年の歳月がたった現在も、なかなか忘れられない思い出として、私の胸に生きております。
(昭和13年度第6回卒業生 小松喜一郎さん談)

小学校に度重なる動員 昭和6年（1931）満州事変、12年日華事変、13年国家総動員法施行により軍主導の国政となる。14年度の「軍事関係書類」によると、1か年だけで次のよ

うに多くの動員要請が豊橋市長大口喜六名で羽根井尋常高等小学校長宛にきている。

項	内 容	場 所	回数
1	入営兵見送り 派遣隊要員出発 応召兵出発見送り	豊橋駅、八町練兵場	32
2	戦傷病兵出迎え	豊橋駅	13
3	帰還部隊出迎え	豊橋駅	17
4	英霊出迎え 遺骨出迎え	豊橋駅	25
5	豊橋市葬 部隊告别式	八町練兵場、市公会堂	8

上記5項は、八町練兵場または市公会堂で行われたが、要請文には「晴天にして八町練兵場にて執行の場合は各学校、団体等なるべく多数参列のこと、雨天にて市公会堂に於いて執行の場合は、各学校代表者は2,3名宛とす……」とある。

海軍志願兵の募集 この見出しの文書には志願者勧誘の資料とするため、昭和14年(1939)11月26日現在の、志願人数と割当数の一覧表が記載されている(下記)。備考欄には、「割当人数は当市割当人数に対して各校区の例年の志願人数その他の状況により」とある。市内で140人の割り当てだが現在のところ78人という督促である。

校区名	志願人数	割当数	校区名	志願人数	割当数
岩田	5	8	吉田方	2	4
東田	7	9	松葉	3	8
八町	7	11	花田	5	8
新川	8	11	羽根井	5	8
牟呂	2	7	合計	78	140

※全市23校中14校省略、合計には14校を含む

戦争一色の学校行事 昭和16年12月8日の太平洋戦争開戦を機に陸軍記念日、海軍記念日、神社参拝、出征兵士の見送り、英霊の出迎え、武道の必須、勤労奉仕などが始まった。これらは皇室尊崇、戦争必勝の信念を児童に教えるのがねらいであった。



戦勝を祈願する神社参拝

カエル、イナゴも食べた 昭和17年金属回収令が出ると兵器製造のためにブランコ、鉄棒、敷地を囲む支柱にかけられていた鎖まで供出した。また、食糧不足を補うため運動場を耕したり、道路の両脇にも作物を育てて食糧増産に励んだ。時には、サツマイモや桑の葉を粉にして食べたり、ヘビ、カエル、イナゴ、セミ、トンボなども食べて飢えをしのいだ。

② 昭和18年(1943)～昭和27年(1952)

年度	児童数	主 な で き ご と
18	1,571	爆風よけに窓ガラスに貼紙作業 修学旅行中止 第5代校長 原田三郎
19	1,500	学校前の芦原を3段歩開墾 大清水に勤労奉仕に出動 児童避難用防空壕造る
20	1,412	運動場を開墾し畑にする 空襲で校区の7割焼失 駅前の開墾と清掃に 高等科参加 8月15日終戦
21	924	天皇行幸広小路通りで出迎え 10月イナゴ取りを実施
22	985	羽根井小学校と改称 第1回小学校卒業式 第6代校長 中野 誉
23	1,037	第1回PTA総会開催 第7代校長 高松 功
24	1,104	低鉄棒設置 戦後第1回修学旅行
25	1,140	PTA寄付により児童図書館設置
26	1,179	校内防犯弁論大会開催
27	1,225	大相撲参観 ローマ字学校開設 養護学級2学級開設 第8代校長 早川茂治

豊橋空襲から終戦当日まで 昭和20年(1945) 6月19～20日の豊橋空襲で校区のほとんどが焼けてしまった。しかし、羽根井小学校の校舎は奇跡的に被害を免れた。この空襲のため、学校は2週間休校となった。7月3日に登校指令が出たものの、家を焼かれた児童が田舎の親戚を頼って転校したため、登校した児童は1,412名中464名に過ぎなかった。その後も連日空襲警報が鳴り、授業は行われたが出席児童は300～400名であった。8月15日、重大放送の予告に全校児童と職員が、西校舎の廊下につけられたスピーカー前に集合した。この日の学校日誌には「警戒警報発令9時20分 同解除10時40分 終戦の大詔降る。12時 全校児童集合 御放送にて詔書を拝す」とだけ書かれている。

③ 昭和28年(1953)～昭和37年(1962)

年度	児童数	主なできごと
28	1,253	創立20周年＝記念大運動会・音楽会・童話会開催
29	1,387	校歌制定 器楽部結成
31	1,579	プール竣工
32	1,589	若草のリズム像寄贈を受ける
33	1,646	歴代最高の児童数 テレビ1台寄贈を受ける 健康優良校として県教委表彰
34	1,633	女子通学服制定36年より着用 第9代校長 村田隆雄 第10代校長 川口 守 (10月より)
36	1,343	全国器楽合奏コンクール優秀1位
37	1,180	観察池・岩石園・科学館完成

器楽部の結成と活躍 昭和29年(1954)、新しい校歌の制定と同時に器楽部が結成され、熱心な練習が開始された。同年、全三河器楽コンクールで優勝、30年には全国大会2位となる。翌年からは校内サカホン独奏コンクールなども実施され、32年に全三河大会第2位、35年に東三河大会で優勝する。その後、36年には中部地区大会第1位、全国大会優秀第1位と輝かしい成績をおさめた。

昭和37年(1962)に羽田中リード部が第1

回NHK全国器楽合奏コンクール最優秀賞を受賞した時には、元羽根井小の器楽部員が大勢活躍した。



全三河器楽コンクール優勝(昭和29.12.10)

プールの建設 昭和24年7月11日の町別懇談会でプール建設の発議があり、PTA理事会でもプール建設を決定。24年度に理事会を9回開き、寄付金集めの委員も決定したが、24年度のプール建設活動はあまりにも早すぎたのか1年で休止となった。当時の記録には、9月26日「なるべく寄付金でまかない、残額を割当制で集める」12月19日「今までの経過報告をし、本年は一応打ち切りを決定」と記されている。その後、建設運動が再開し、昭和31年(1956)に完成した。

当時、学校施設や備品の整備には寄付金を集めることが当然で、大口寄付の見通しが立った後、各町の負担額が決まった。各町の総

羽根井小学校のプール建設費

各町負担金	931,370円	} 約104万円
特殊寄付(大口寄付)	112,000円	
市補助金	600,000円	} 80万円
市交付金	200,000円	
利子	2,184円	
合計	1,845,554円	

豊橋市内の小学校のプール建設

年度	学校名
27	二川(当時は渥美郡二川町)
29	八町、牟呂
30	東田
31	羽根井、花田
32	福岡
35	松葉、下地、栄、高根

代は責任を持って決められた負担額を集めた。プール建設における市の負担は80万円、校区の負担と寄付金は約104万円だった。

竣工翌日から小学校は水泳指導を計画した。寄付してくれた家庭の中学生にも泳ぐ機会を与えなければということで、夏休み中の24日間の午後3時から5時までを開放することになり、この間の監視を12町が2回ずつ分担するお願い文が出ている。しかし、文末には「高校生と一般の大人はご遠慮ください。」と書かれていた。



プール開きに模範泳法をした人々

④ 昭和38年(1963)～昭和52年(1977)

年度	児童数	主なできごと
38	1,145	創立30周年＝記念式典・記念芸能祭 エルモ式16mm映写機1台・国旗掲揚 塔ポール・グリーンベルト寄贈 26全教室でテレビ学習開始
40	1,088	自然に親しむ日(月1回)始まる
41	1,117	P T A 文部大臣賞受賞
42	1,128	図書館コンクール東海地区優勝
43	1,144	日本一健康優良学校受賞 自転車の安全な乗り方で全国大会で 団体2位、個人1位 修学旅行信州方面(体験学習)
44	1,132	母親花壇・屋上学習コーナー新設 健康優良学校受賞全国発表会
45	1,084	中央階段にすべり台設置
47	1,012	第11代校長 浦川 長
48	970	創立40周年＝ピアノ開鍵式・ 目で見る教育展・記念体育大会
49	957	交通少年団結成式
50	924	全教室にカラーテレビ設置
51	942	校歌の書かれた新校旗寄贈 第12代校長 小久保敏雄
52	917	学校文集「日だまり」発刊

日本一健康優良学校受賞 昭和30年(1955)頃から、給食指導、交通安全指導、器楽合奏、視聴覚教育、理科教育などに対するPTAの積極的な活動と協力により、多くの成果を上げていたが、34年の川口守校長着任により更に健康教育を中心とした学校経営が強化された。その結果、学校給食優良校として文部大臣賞受賞。36年に全日本器楽合奏コンクール全国大会で最優秀、38年に視聴覚教育奨励賞、41年にPTAが文部大臣賞を受賞した。また、交通安全功労団体として県警本部長・県交通安全協会会長より表彰、自転車の安全な乗り方コンテスト全国大会で団体2位、個人1位に入賞など数々の成果が認められ、43年栄えある日本一健康優良学校を受賞し、翌44年には全国発表会が行われた。

⑤ 昭和54年(1979)～平成18年(2006)

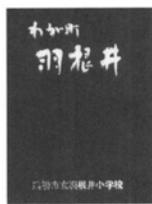
年度	児童数	主なできごと
54	931	七夕集会開催 第13代校長 岡本 啓
55	915	講堂解体し体育館竣工
56	923	P T A 廃品回収(年3回) 運動会にP T A 一品寄付の販売
57	890	創立50周年＝記念運動会・記念誌発行 同窓会名簿発行 P T A 自転車点検
58	860	今月の歌コンクール あいさつ運動発表会式
59	816	再会の碑除幕式
60	796	清掃、歌声コンクール 版画展
61	730	市制80周年記念タイムカプセル埋設 「わが町羽根井」発行
62	708	第14代校長 森 鋭一
63	684	プレハブの仮設校舎で授業
平元	682	新校舎竣工 記念碑除幕式
2	663	最後の七夕集会 地球儀除幕式 防犯パレード 第15代校長 石積督三
3	628	日曜参観日「親子で風作り」
4	634	創立60周年＝記念式典 記念誌と同窓会名簿発行 「あにまるランド」・和太鼓寄贈 校区31社の物産展 盆踊りと交通安全の夕べ

6	600	第16代校長 植田哲夫
10	503	プールに温水シャワー敷設
12	492	第17代校長 吉田和代
13	476	「ふれあい広場」始まる
14	486	創立70周年＝ピアノ寄贈（簡保） 音楽室に冷暖房寄贈（簡保） アルミステージ寄贈（校区・同窓会） 学校週5日制開始 「土曜ひろば」始まる
16	468	第18代校長 山本隼彦
17	489	2学期制試行
18	471	市制80周年記念のタイムカプセル開封

「わが町羽根井」発行 昭和60年（1985）4月の職員会で羽根井校区史づくりが決定する。7月、校区民に「校区史づくりのアンケート」を依頼し、それを基に、編集委員と町内の代表者47名が、羽根井地区市民館で5日間にわたって2～3町ずつ座談会（聞き取り）を開催する。その後、校区史推進委員会、校区史検討委員会、校区史部会など2年間に56回以上の会議を重ね、授業後の調査や資料収集など羽根井小職員の献身的な努力によって「わが町羽根井」が完成した。

夏休み返上－苦労が1冊の本に－

私が羽根井小に赴任したのは、昭和58年4月でした。当時、学校は総力を上げて理科教育、視聴覚教育に取り組んでいました。このような中で60年に羽根井の校区史づくりが持ち上がったのです。



「わが町羽根井」

一番の問題は何よりも職員が校区の歴史について、ほとんど知識を持ち合わせていなかったということです。予定のページ数を全員に割り振ったものの、みんな「何をどのように書いてよいものやら」途方に暮れてしまいました。それでも2年後の発行は決まりましたので、みんな書く材料を求めて、授業後や部活終了後、時には土・日にも地域に出かけて、資料集めに奔走しました。本作りの2か年間は、みんな夏休みがありませんでした。

今、本棚に並ぶ「わが町羽根井」を見ると苦労したものの、貴重な資料や言い伝え、体験談などを一冊にまとめておいてよかったとつくづく思います。

（編集責任者 山田政俊先生談）

新校舎竣工とプレハブ校舎 新校舎竣工までの2年間、学校行事なども変更された。昭和63年度（1988）の運動会は春早く5月22日に開催された。翌平成元年はプレハブ校舎が建てられていたため、羽田中学校の運動場を借りて5月21日に行われた。また、体育の授業は、狭くなった運動場の他に羽根井公園でも行われた。子どもたちは、簡易なプレハブ校舎の中で夏は汗びっしょり、冬は凍えそうになりながら授業を受けた。雨の日は雨漏りがして階段はびしょびしょ、屋根がトタンだったため、雨音がやかましく先生の声が聞こえないほどであった。

ピカピカの音楽室

4階建てで、クリーム色に光るピッカピカの校舎の中で一番気に入った部屋は音楽室です。このかべに羽根井小学校の校歌の音符が刻まれているのです。私は、あれが気に入りました。それと図工室です。木のいすも入り、図工が楽しくなるような感じの教室です。おまけにあの木のおいが好きです。「ピカピカの校舎に負けないぐらい、いい子になりなさい。」の校長先生のお言葉どおり、新校舎をピカピカにみがくように努力します。（平成2年度6年生の感想文）



新校舎使い始め式での万歳

新校舎改築までのあゆみ

昭62.3.25	市議会で本校改築を承認
63.6.26	校舎お別れ会
10.25	起工式
平元 9.27	校舎使いはじめの式
2.3.21	記念碑除幕式・竣工祝賀式

※羽根井小学校新校舎建設費（改築費用）9億3,665万円

(3) 修学旅行の移り変わり

小学校の思い出は、友達、先生、給食、運動会、遠足、課外活動、修学旅行など人によってさまざまである。ここでは6年間に1回しかない修学旅行の変遷をまとめる。

2泊3日の特別な修学旅行 昭和15年(1940)
は皇紀2600年の年、国威高揚を目的にさまざまな行事が企画された。開校以来、伊勢への1泊2日の修学旅行が、この年だけ伊勢～奈良・京都への2泊3日の特別な修学旅行となり、奈良では橿原神宮を参拝した。

またこの年には、一部の中等学校では全職員・生徒が橿原神宮や桃山御陵を団体列車で日帰り参拝したと言う。

修学旅行に行けない6年間 戦争が厳しくなった昭和17年度は、伊勢への日帰り修学旅行で朝早く出発し夜遅く帰宅した。その翌18年から20年度までは戦争が一層激しくなり中止された。戦争が終わった後も昭和23年度までは生活が苦しかったこと、占領政策で神社・仏閣への集団参拝が禁止されていたなどの理由から中止となり、修学旅行に行けなかった時期が6年間続いた。

戦後第1回の修学旅行 再開したのは、昭和24年度も終わりに近づいた25年3月11～12日に京都・奈良方面へ行った。それまで厳重な規制があつて立案も思いもよらなかったが、10月頃に神社、仏閣の見学が許可されたので急ぎよ立案することになった。しかし、実施には85%以上の賛成が必要だったため、父兄のアンケートを行った。その結果、賛成が

＜当時の修学旅行綴りからの抜粋＞
○こづかいは100円○準備 新しく作ることはやめましょう(弁当1食とパン、米3食分)
○金銭のとり扱い方 お金は二つ位のさいふに入れておくこと(一つの方は自分のじゅばんとか身につける着物の中にぬいこんでおく)。○みやげ物はできるだけ買わないこと。家で買って来いと、なるべく言いつけてもらわないこと。食べるみやげ物は、くさっているかもしれないので特に注意すること。

89%余りあつたので立案にかかった。

手拭いが凍った一心に残る修学旅行一

午前5時30分、お手製ズックの肩かけカバンに貴重な米を入れ、身に合わぬ衣服をまとった一団が、バラック建ての豊橋駅から京都へと旅立った。他の新制中学も乗り合わせた列車は、満員で息苦しいほどだった。それでもトンネルが近づくと「煙を入れるな!」の声がかかる。そのたびに窓を閉めるのだが、ガタビシやっているうちに鼻まで黒くなった者もいた。京都で、曇り空の下、御所、金閣寺、平安神宮、智恩院と見学して回った。どこに行くにも市電か徒歩。今のような観光バスやタクシーなどは走っていない時代だった。後で金閣寺が焼けたと聞かされて、おれ達の見たのが最後の姿だったのかなあと、あれこれ話した。京都の3月はまだ寒く、宿舎の手すりに干した手拭いが翌朝にはコチコチに凍っていた。翌日は清水寺の舞台に立った後、奈良へ向かった。どこをどう回ったかよく思い出せないが、大仏殿の柱くぐりで、帽子を取ったまま置き忘れてきたのが妙に印象に残っている。お土産には五角形の生姜糖のようなものを買った。「甘くておいしいね。」と言った母の言葉と100円から5円残したことが今でも懐かしく思い出される。
(昭和24年度第17回卒業生 余郷修一さん談)



平安神宮にて(昭和25年3月11日)

往復夜行列車、実質4日間 昭和26年度は10月8～9日の1泊2日であったが、集合は前日の23時30分、出発が8日夜中の0時19分の夜行列車であった。奈良着は早朝3時34分、市内9箇所を見学し、奈良駅発11時で京都に向かう。京都御所、二条城、本願寺を見学し、駅前の北海旅館に泊まる。翌日は市電で清水寺、徒歩で智恩院、平安神宮など6箇所を見学し再び市電で嵐山に。帰りの京都駅集合は9日の23時30分、京都駅発0時40分の列車で

帰途につく。豊橋到着は早朝6時44分で、1泊2日というよりも1泊4日の修学旅行であった。1箇所でも多くの神社・仏閣や史跡を見せたいという教師の意気込みが感じられる。

昭和27～29年度も1泊2日で奈良・京都。学校集合は4時40分、豊橋駅発5時28分、豊橋着は20時か21時の強行日程だった。

再び伊勢へ 昭和24年度（1949）から続いた奈良・京都への修学旅行も日程的に強行なことと、費用が約900円、小遣300円かかり不参加者が11名も出たこともあり、31年度から再び戦前のように伊勢となる。費用は650円、小遣は200円となった。

信州・霧ヶ峰へ 昭和42年度（1967）、健康教育推進の考えにそって、修学旅行検討委員会が発足した。従来の修学旅行を反省し、信州・霧ヶ峰方面、その名も「体験学習」と計画した。しかし、市全体の方向と違うこと、2泊3日であること、医療問題に難があることなどから、最初の申請は許可されなかった。翌43年度は、7月26～27日の1泊2日とし、事前に職員が全コースを下見して許可された。



白樺湖・霧ヶ峰方面の修学旅行

再び京都・奈良へ 昭和43年度（1968）から20年間続いた信州、霧ヶ峰方面への体験学習も「悪天候の時は危険性もある」などの理由で62年度を最後に中止となり、63年度から現在に至るまで再び京都・奈良の1泊2日の修学旅行となる。

旅行費用（京都・奈良）の比較 小遣は100円から約5,000円に、京都市内の見学は徒歩・市電で回った時代からバスでの見学に変わり、平成15年度からは班ごとにタクシーに分乗して分散学習するようになった。タクシーでの分散学習時の拝観料や入場料、駐車料金などは班ごとに違い、平均1人5,300円程度である。

昭和24年度		平成17年	
徴収額 (内訳)	450円	徴収額 (内訳)	23,800円
汽車賃	163円	交通費(JR、近鉄)	7,110円
宿泊料	200円	貸切タクシー代	5,276円
京都市電	12円	宿泊代	8,400円
拝観料	15円	2日目昼食代	945円
雑費(案内料他) 3円		見学代(大仏殿・国宝館)	300円
合計	393円	荷物運搬料金	350円
※差額は返却		取扱企画料金	800円
		添乗員費用	319円
		旅行傷害保険	300円
		合計	23,800円
※小遣100円		※小遣いは自由(5,000円以内)	

3 羽田中学校

(1) 羽田中の誕生

昭和22年（1947）3月の学制改革の目玉は「六・三・三・四」制で3か年の新制中学が義務教育になったことと男女共学であった。同年4月1日の新制中学校の発足にあたり、羽根井小学校と花田小学校を通学区域とする西部第一中学校が開校した。しかし、戦後の財政難の中で新制中学校を設立することは大変なことであり、西部第一中学校も羽根井小学校の西校舎を借りて開校した。

羽根井小と花田小の合併問題 西部第一中学校の独立校舎建設の動きがおこり、どこに建設するかという問題が浮かんできた。土地の確保も難しい、財政も厳しいということから一時は羽根井小学校を中学校にし、羽根井小と花

田小を合併して1つの小学校にする計画もあったが、地域の人々が両小学校を存続させ、別の土地に新しい中学校を新設することを強く願い、関係当局に働きかけ、西羽田町43-1番地の氏原製糸の跡（現在地）と決まった。昭和24年（1949）3月26日校舎の起工式が行われた。

(2) 羽田中60年のあゆみ

① 昭和22年（1947）～昭和51年（1976）

年度	生徒数	主なできごと
22	519	豊橋市立西部第一中学校として発足（羽根井小学校内） 初代校長 高橋正次郎
23	817	豊橋市立羽田中学校と校名変更 校章・バッジ制定
24	994	第2代校長 森田琢磨 昭和25年2月新校舎竣工式
25	1,007	羽田中生徒の信条制定 「羽田中健児の歌」できる
26	921	本館2階建増築工事竣工 国旗掲揚塔・正副校門完成
27	935	校旗制定 弓道場・相撲場完成
29	1,193	「講堂建設」の陳情書提出
32	1,283	創立10周年＝記念式典・記念バザー開く 卒業記念に「考える人」寄贈 第3代校長 田中清一
34	1,161	鉄筋校舎（8教室）竣工 第4代校長 小林清一
35	1,322	羽田中愛唱歌集作成 大塚海岸で2泊3日の臨海学習
36	1,534	羽田中校歌制定 女子制服人気投票で決定
37	1,676	歴代最高の生徒数 NHKの器楽合奏 コンクールで全国優勝
38	1,511	1年希望者東栄町で2泊3日の林間学校
40	1,140	体育館完成 第5代校長 牧野秀敏
41	1,051	生徒信条「雨ニモマケズ」が決定
43	979	1年東栄町青年の家で林間学校 2年棚山高原で羽田ジャンボリー
44	964	男子の長髪許可 特殊学級新設 第6代校長 山口泰甲
49	963	本館竣工し木造校舎消える 第7代校長 鶴田喜良
51	921	羽田中校区青少年健全育成決起大会 プール完成

昭和23年10月1日、西部第一中学校から羽田中学校に校名を変更した。それに合わせて校章やバッジの図案を生徒から募集し、2年生の宮下勝之君の作品が選ばれた。



花田小の「花」と羽根井小の「羽」を重ね、中学校の「中」を組み合わせたもの。「羽」が下を向いているのは鳥が飛び立つときの力強い姿を表している。

羽田中の校章

2か月の仮校舎生活 開校当初は教室もなく、羽根井小学校の西側校舎で「朝から学校組」と「昼から学校組」に分かれて二部授業をしていたが、昭和25年1月に木造2階建ての新校舎が2棟竣工する。1月の寒さの中を自分の机や椅子はもちろん、いろいろな備品をかついで羽田中学校まで何回も往復した。このような状況の中、3回生はわずか2か月間新校舎で学んだだけで卒業した。また、翌年3年生になった4回生は、校舎竣工直後でもあり毎日のように校庭整備に追われた。



快晴の校庭で創立10周年記念式典

19年間待ち望んだ体育館 昭和30年（1955）1月28日に講堂（体育館）建設の陳情書を提出してから10年、待ちに待った市内最初の体育館が昭和40年4月に竣工した。それまでは入学式、卒業式はもちろん生徒会立会演説会、弁論大会、小芸能祭などは羽根井小講堂を借りて開催していた。卒業式などは自分の椅子を運んでの開催だった。



生徒会立会演説会（羽根井小学校講堂昭和39年）

② 昭和52年（1977）～平成18年（2006）

年度	生徒数	主なできごと
52	922	創立30周年＝記念誌「羽田中30年のあゆみ」発行・正門前に藤棚設置（PTA寄贈）
53	905	学園祭・芸能祭・学芸会をまとめて文化祭に改称 最初の立志式を実施 第8代校長 石原成章
55	859	地区別懇談会初めて開催 第9代校長 三上 功
57	903	第10代校長 小柳津森郎
58	910	「根知和羽田中」制定
60	918	「きのう・きょう・あした」発行 武道館（誠心館）竣工
61	917	第11代校長 近藤正典
62	906	創立40周年＝同窓会名簿発行・校舎屋上に校名の看板設置・正門横にタイサンボク定植
平元	778	夏休みに手作りいかだで当古橋から牛川渡船場までの川下り 第12代校長 高木眞一郎
3	679	防犯モデル道路推進事業10周年大会開催 新しい部室棟完成
5	600	体育大会会長縄跳び開始（最高記録50回） 第13代校長 近藤清司
6	591	愛知国体集団演技に2年生参加
7	586	青少年赤十字に加盟する 全国放送教育研究会の会場校
8	609	創立50周年＝「羽田中50年」と「同窓会名簿」発行 第14代校長 松葉武男
9	585	体育祭と文化祭を学校祭と改称
11	545	第15代校長 鈴木佳和
13	492	大平宿・飯田市自然農業体験
16	448	第16代校長 竹本富士夫
18	394	創立60周年

(3) 立志式のあゆみ

戦国時代に男子が14・15歳になると元服したことの故事にならい、1年生と3年生の間にあつて、たるみの生じやすい2年生対象に、「志」を立てる立志式がこの地方で最初に羽田中学校で挙行された。

羽田中学校実施後、県下はもちろん多くの中学校で実施されたが、学校週5日制開始後取り止めた学校が多い。

年度	内 容
53	第1回立志式（54.2.3） 式典・記念行事・生い立ちの記 講演 技科大学長 榊米一郎氏
54～61	式典・講演・記念行事・生い立ちの記
62	第1部 式典・講演・記念行事 第2部 1泊2日茶臼山でスキー
63	天皇陛下崩御のため中止
平元	式典・講演
2	75km耐寒歩行 御前崎から学校まで
3	学校に5時半集合 少年自然の家までの歩行
4～5	式典・講演 市内各福祉施設での奉仕活動
6	名古屋市市内社会見学・奉仕活動・体験発表
7	市内各福祉施設での奉仕活動・体験発表
8	20km歩行 蒲郡駅－竹島一学校
9	30km歩行 三河田原駅－蔵王山一学校
10	42km歩行 新居駅－太平洋海岸－少年自然の家
11	50km歩行 刈谷駅－国道23号一学校
12	50km歩行 学校－葦毛湿原－普門寺－大清水一学校
13～18	2泊3日 大平宿・飯田市自然農業体験



茶臼山高原での立志

4 保育園

(1) 花ヶ崎保育園

施設・経営主体／社会福祉法人育英会

開園／昭和6年（1931）5月20日 定員／200名



花ヶ崎保育園

年	月日	主なできごと
6	5.20	豊橋市中郷町地内に開園 豊橋共存協会花ヶ崎共存園として経営開始
9	4.1	豊橋市方面事業助成会に移管、花ヶ崎保育園と改称
20	6.20	空襲で園舎焼失し休園となる
21	12.1	羽田保育園分園と改称 花田小学校の2教室と土間を借用し経営再開
26	6.1 7.23	豊橋市社会福祉協議会に移管 現在地（羽根井本町10）に敷地1,394㎡を求め園舎を新築移管 花ヶ崎保育園と改称 定員80名
27	6.11	遊戯場増築 定員100名
40	3.15	遊戯室・便所・渡り廊下増築 定員150名
46	1.1	社会福祉法人育英会に移管
52	4.1	定員200名

(2) 往完保育園

施設・経営主体／（社）豊橋市西部保育事業会

開園／昭和50年（1975）4月1日 定員／180名



往完保育園

年	月日	主なできごと
50	4.1	往完保育園開園 定員120名
57	4.1	園舎増築 障害児保育指定園となる 定員150名
平9	4.1	定員180名
13	3.1	園舎増改築工事竣工

5 羽根井地区市民館

(1) 地区市民館ができる前

学校が活動の拠点 昭和31年（1956）は今からちょうど50年前。戦後10年を経過し、人々は敗戦のショックから立ち直り、民主国家建設に燃えていた。そのため、各種の団体・組織は多くの会議や集会を開催し、盛んに活動していた。

現在のように地区市民館がない時代、何をするにも小学校が会合や活動の拠点であった。羽根井小学校の学校日誌には、校区の各種団体の会合や活動が応接室、裁縫室、講堂を使用して毎年100回以上開催された記録が残っている。会合の種類と回数は下記の通り（運動場の使用は含まれていない）。

昭和31年度の会合

団体名	回数	団体名	回数
婦人会役員会*	25	消防団	2
社会教育委員会	12	補導委員会	2
社会学級*	13	同窓会	2
プール建設委員会*	9	健民少年団*	2
民生委員会	8	報徳会*	2
育成会理事会*	8	遺家族委員会*	2
子ども会	7	引揚者総会*	2
防犯委員会	7	バザー委員会*	2
総代会	6	のど自慢大会*	1
体育委員会	5	校区青年研修会*	1
更生保護婦人会	2	羽根井親睦会*	1

*は現在なくなった会

婦人会の役員会が多いのは、雑貨品、日用品、衣服などを町内に販売し、その利益を校区敬老会開催や諸活動の資金に充てていたからである。会議が校内のため校長、教頭はしばしば参加して助言を求められた。時には教

員も参加して助言やお手伝いをする事があった。

(2) 地区市民館の活動

自主活動 羽根井校区には校区市民館がないため羽根井地区市民館を多く利用している。地区市民館は校区市民館と違い、市主催の事業が優先するため、校区住民が自由に利用できる日時や部屋が制限され、住民の自主的な文化活動は活発とはいえない。しかし、開館以来30年、高齢者団体の詩吟、民謡、舞踊、歌謡、俳句、書道や自主団体の茶道、華道、空手、短歌、舞踊、カラオケなどは長年継続的に活動している。

地区市民館まつり 11月上旬開催の地区市民館まつりには、市民館主体の芸能発表会と作品展に加え、総代会・各種団体・保育園・小



芸能発表会（平成17年11月）

歴代の館長と運営委員長

年度	館長	運営委員長
昭和52年	川口 守	中川 一男
53～55年	岡本 健一	〃
56～58年	藤田毅一郎	河合 武男
59～61年	井上 政次	〃
62～63年	近藤 哲郎	大場 成一
平成元～2年	松井 恒	〃
3～5年	平尾 準次	小山 文雄
6～8年	西郷 平	〃
9～11年	加藤 功	岩間 洸
12～14年	高柳 一敏	〃
15～18年	近藤 将紘	夏目 章一

中学校など地域住民が参加する発表会や作品展もあり毎年盛大に行われている。

6 町公民館と公共施設など

町公民館 町内活動の拠点となる公民館は戦後に建設され、町の総会、組長会、慰労会、祭礼詰め所、敬老会、子ども会のお楽しみ会、葬祭、習い事、市役所からの説明会などに利用され、町民の親睦と団結、教養を高めるのに役立っている。

公民館完成年度

完成年	名称	完成年	名称
昭和26	野黒町公民館※	昭和45	羽根井本町公民館
昭和31	八通町公民館	昭和56	羽根井元町公民館
昭和36	往完町公民館	昭和61	白河町公民館
昭和39	錦町文化センター	平成7	花中公民館
昭和40	中郷町公民館		

※野黒町公民館は平成14年8月に改築

公共施設 羽根井小学校の一角、旧羽根井消防署跡地には昭和52年（1977）5月14日開館した羽根井地区市民館が、元町の旧下水処理場跡地と丸織紡績工場跡地には昭和58年2月開館した豊橋市中央図書館と羽根井スポーツ広場がある。このほか、校区内には西部窓口センター、豊橋市南消防署西分署、羽根井交番があり、公園も8か所ある。

民間施設 羽根井校区には郵便局・銀行各2か所、多くの医療機関、大型スーパー、24時間営業のコンビニエンスストアやレンタルビデオ店、書店、葬祭業など日常生活に欠かせない施設・商店が数多くあり、生活するには極めて便利である。

その一方、昭和62年3月当時、野黒町の人道橋から錦町の交差点付近までの通称羽根井銀座で営業していた54軒の自営業のうち、29軒がこの19年間に後継者不足や人口減少、コンビニエンスストアの進出などの影響で廃業・転居した。

7 羽根井の社寺と史跡

(1) 素盞鳴神社（中郷神社）

祭神 素盞鳴尊

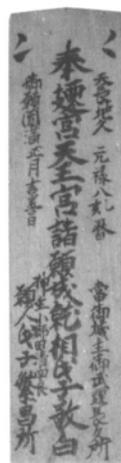
御嶽神社（合祀）

- ・境内社 塞神社
秋葉神社
- ・例大祭 毎年4月第4土・日曜日
- ・宮司 白井清夫
- ・氏子 中郷町、花中一区、花中二区
野黒町、東小田原町、西小田原町
- ・所在地 花田町字中郷93番地

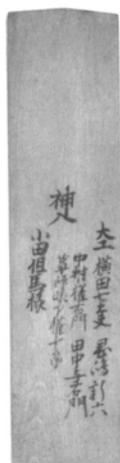
この神社がいつの頃からこの地に祀られてきたのか、また、どういう由来からかはっきりした記録は残されていない。

古くから花ヶ崎村と呼ばれ、鎌倉時代の開村であると伝えられ、その頃から村の氏神として信仰されてきたのであろう。棟札で一番古いものは、豊田珍比古著「豊橋神社誌」の記録では「寛文三年正月吉祥日、本建立天王御宝殿一字」（1663年）とあるが、実物は見つかっていない。昭和57年4月に本殿の床下に収納されていた棟札7枚と天王社奉納花ヶ崎村絵図により、現存する最古の棟札は、元禄八年乙亥正月吉善日（1695年）のものである。絵図には「文化十一年申戌夏四月（1814）」とあり、小池是知と牧野裕之の両者によって作成されたと考えられ、たたみ2畳ほどのものである。この図によると現素盞鳴神社の位置には、牛頭天王社の名が記されている。

最古の棟札→



棟札（表）



棟札（裏）



素盞鳴神社（中郷神社）

天王信仰は、平安時代の中頃、都に疫病が流行して人々は怨霊の仕業と恐れ、怨霊退治の呪術を盛んにした。天王社は京都の八坂神社に端を発するもので、吉田神社、橋良神社も天王社であった。

慶応4年（1868）3月17日、神仏分離令が発令される。僧侶が別当などと称して神社の神主を演じているのを神と仏を分離して、僧侶は還俗するよう指示した。その後、さまざまな経緯により、天王社も祭神を日本古来の神とする神社となり、明治元年（1868）、素盞鳴神社と正式名称となった。

地元では、通称中郷神社でとっているが、古老の話では、昔、花ヶ崎神社としようとしたが、羽根井の方から反対があり、取り止めになったと伺った。

棟札によると寛文三年から現在まで約330年間に造営5回、補修6回したことが分かる。現在の社殿は、佐原徳氏設計、下谷泰三氏請負で昭和37年（1962）4月竣工した。

例大祭は、昔、7月であったのが、明治に入り4月16日に変更された。今は4月の第4土・日曜日に行われている。元来花火の祭であり、宵宮の晩には柳生川の堤で打ち上げ花火が賑やかに行われた。しかし、家々が多く建ち並び、火災の恐れ、警察の規制も厳しく取りやめとなった。10数年前より境内で手筒花火が復活され、餅投げなどで賑やかさを取り戻している。

(2) 八劔神社

祭神 日本武尊

白髭大明神 (武内宿弥) 合祀

- ・境内社 塞神社
秋葉神社
- ・例大祭 毎年4月10日前後の土・日曜日
- ・宮司 水谷雅則
- ・氏子 羽根井町、羽根井元町、羽根井本町、八通町、錦町
- ・所在地 花田町字西郷59番地

古い棟札は戦禍で焼失したが、元宮司水谷林作氏の調査記録から、この地の郷土、鈴木三郎右衛門が私邸内に「八劔大明神」を勧請したことから始まったとある。最古の棟札の裏書きに「宇時永禄元年^{ひのとう}丁卯六月吉祥日（※1）」（1558）とあり、今から450年も昔である。現在の位置にお祀りされるようになったのは、370年前のことで、明治元年、神社制度改正で社号も八劔神社となり、明治14年（1881）（※2）村社に列せられた。



八劔神社

一方、現羽根井地区内にもう一つの古社無格八劔神社があった。現在、神社所有の地（旧字名：八劔40番地／羽根井本町公民館駐車場から錦町・了生薬局一带）に白髭大明神（武内宿弥）が鎮座していた（境域600坪）。この地の芝切りと云われる鳥居、白井の牟呂出身の数名によってこの神社を鎮守として祀っていたと伝えている。

花ヶ崎村絵図にこの社が入っていないこと

は、八劔の地は昔、牟呂村に属していたものと考えられる。この神社の起源は棟札によると正保2年（1645）（※3）で長寿保持の神として、また、石を報饗する神であり、厄除を祈願する境界鎮守の神でもあった。

明和3年（1766）に日本武尊を合祀し「八劔大明神」と改め、明治初め、「八劔神社」と改称したが、その後、双方の協議の結果、羽根井と合併し二つの八劔神社を共同の氏神と崇め、大正4年（1915）1月28日、現在の八劔神社に合祀された。

昭和9年、宮司水谷林作氏が伊勢神宮の御神木を拝受し、社殿を造営したが、戦災で水屋を残すのみで全て焼失した。その水屋も伊勢湾台風で倒壊し、屋根が瓦葺から銅葺となり修復され、現在に至っている。

例大祭は、今は毎年4月10日前後の土・日曜日であるが、明治36年までは6月10日であった。祭の日は、神前で神楽が奉納された。その起源は安永2年（1773）から明治40年（1907）頃まで行われ、一時中断したが、昭和11年（1936）8月に再興された。神楽は市内でも有名になり、正月にも門付をして歩いたと云われる。しかし、獅子頭など使用したものは戦禍で焼失し、今では神楽があったことも記憶する人がいない。戦後、山車が出たり、境内で芝居や映画も上映されたりしたこともあったが、今では餅投げが唯一の楽しみとなっている。

長い歴史ある神域も変化し、昭和9年までの450年間に造営・改築の記憶は23回にも及んでいる。現社殿は佐原徳氏の設計で昭和42年（1967）5月に竣工した。

※1 永禄元年是戊年である。丁卯が正しければ、永禄10年となる。また、他の文献では弘治元（1555）年とも記されている。

※2 他の文献には明治5（1872）年とある。

※3 石碑によると延宝4年（1676）とある。

(3) 羽田八幡宮と牟呂八幡社

白河・立花・往完町は、明治時代まで集落のない土地であった。白河・立花町が羽田村、往完町は牟呂村に属していたために、羽田村は羽田八幡宮へ、牟呂村は牟呂八幡社の氏子として現在に至っている。

(4) 塞^{さい}神社

・所在地 素盞鳴神社境内
八劔神社境内

・例祭 9月14日

塞神は塞の神と呼ばれ、才之神、財埜神とも書かれ、街の神、道の神とも言われ、部落境や峠、道端に悪疫防除の神として祀られている道祖神と同じものである。素盞鳴神社から元の大林製糸一帯を古い字名で塞神といい、花ヶ崎村の塞神が祀ってあった。最古の記録では、「享保十三年（1728）三月本遷宮才之神一社」の棟札がある。例祭日の9月14日に祭典を行っていた。

塞神社は、元からこの素盞鳴神社に祀られていたのではなく、一説では、JR東海道本線の塞（賽）神踏切の位置にあったものが、明治21年（1888）、鉄道開通にあつて素盞鳴神社に移されたという。また、別の説では大林製糸内にあった社が塞神の本社で、明治時代に合祀されたとも云われている。村から町へ次第に人口が増え、昭和2年（1927）、羽根井の八劔神社と松山の素盞鳴神社とそれぞれの地区ごとにお祭りができるように分祀された。現在では、町代表者、氏子総代などで祭典を行っている。



塞神（素盞鳴神社境内）

塞神（八劔神社境内）

(5) 秋葉神社

神社の境内、町公民館の敷地内に、あるいは道路の角に小さな社が祀られているのが秋葉神社で、火災に脅威を抱いた人々が遠江の秋葉神社を勧請し、その加護を祈ったのが始まりである。各町内で町役員、町氏子総代が秋葉総本山へ代参されて、11～12月に代表者によって例祭が行われている。

所在地と創設年代

- ・素盞鳴神社境内 明治34年（1901）3月、氏子／中郷町、花中一区、花中二区
- ・八劔神社境内 文政9年（1826）氏子／羽根井町、羽根井元町、羽根井本町
- ・野黒町48番地 大正10年（1921）
- ・八通町63番地 昭和15年（1940）
- ・錦町131番地 不明（－）
- ・白河町1番地 大正3年（1914）
- ・立花町27番地 大正14年（1925）
- ・往完町字往還西66番地 不明（－）



秋葉神社（素盞鳴神社境内）

(6) 御鋤^{おくわ}神社

素盞鳴神社本殿に合祀、昭和38年（1963）までは旧社殿の右隣に祀られていた。お鋤さまと呼ばれ百姓の神で起源は江戸時代のものである。例祭は11月17日、秋の収穫を感謝し、翌年の豊作を祈る。現在では神事など各町内三役の人々が集って祭典を行うだけとなった。

(7) 忠魂碑

八劔神社境内に大きな忠魂碑が建っている。裏面に「大正9年11月尚武会在郷軍人青年会建之」とあり、日露戦争戦没者の多くの名が刻まれている。昭和61年現在地に再建されて春・秋二回遺族会で慰霊祭が行われている。



忠魂碑

(8) 大法寺と宗教団体

羽根井地区には古くから寺がない。昭和5年(1930)、八劔(現錦町)の地に身延山末寺石橋妙定尼が七面結社を結成し、翌6年宗祖日蓮聖人650年遠忌の際、堂宇を創建し、大法寺教会から昭和24年、大法寺となった。後継の石橋卓定上人は、数年前堂宇を神野新田の地に移転し、羽根井からまた寺院がなくなった。他に立正佼成会等宗教団体がある。

(9) 庚申さま

神仏習合時代(※)、各部落ごとにあったようで、干支の庚申の日(通例年6回、閏年は7回)村人が集まり、各家を順に廻ってお日待ち、食事を饗し、大きな数珠を回して百万遍の念仏を唱えた信仰行事で、農村の神であるが、元々中国から伝えられた道教の教えでもある。今でも受け継がれ続けている部落もあるが、羽根井では時代と共に簡素化され、20~30年前から行われなくなり、使用されていた掛軸・大数珠、また、お膳・食器類は、古くなりお寺に納めらたりして処分された。素盞鳴神社境内右側のお堂の中、左に庚申の青面金剛童子、右にお地藏さんと呼ば



庚申さま(中郷神社境内)

庚申さま
(八劔神社隣)

れる役のえん おつの えんのぎょうじや小角(役行者)が祀られている。また、八劔神社のすぐ隣のお堂の中にも同じように庚申の碑が木々の間にひっそりと祀られ、文化8年(1811)の文字が読みとられる。代々、元町の白井吉彦氏の家で祀っている。
※日本の神々と仏教を調和、融合させようと考えて平安時代に盛んとなり、江戸時代まで続いた。

(10) 羽根井念仏講ほか

念仏講と云われるものは、江戸時代、部落ごとに講があったようで、十三仏念仏や念仏御真言を唱える会のことで、江戸時代には羽根井には一つの寺もなく、古くから羽根井に住んでいる人々の檀那寺も悟真寺、浄慈院、龍拈寺、正林寺とさまざまで、念仏講が住職の代役をして葬儀から法事まで行っており、彼岸会法会、千地藏なども行われていたようである。前述の庚申と念仏講の行事が同居していたようにも思われるが、詳細はよく分からない。羽根井念仏講は30人で構成されている。現在、唯一の鉦が残っていて、「明治29年(1896)12月吉日、三州渥美郡羽根井念仏講中」と刻まれている。

昔、八劔さんまいじょう三味場(墓地)は鬱蒼とした小高い所にあり、土葬されていた。現在の八劔共同墓地は区画整理のため、昭和44年(1969)8月に掘り起こされ、少し移動しているが、その時の遺骨・遺品、出土品などは羽根井念仏講先祖菩提の碑が建てられて、その下に納められている。

講中の方が亡くなれると鉦を打ちつつ町内を歩いて知らせたのも、30年前頃からやらなくなり、毎年8月14日、墓地にて新盆を迎えた人々に松焚きをして供養していたのも、平成17年に中止され、羽根井念仏講の名称も八剣共同墓地管理委員会と変更された。



また、現在の中郷町161番地の1にも墓地がある。これも三味場であったようで、小野田浩さんの話では、小野田一統の墓地のようで、文化文政の墓もあり、25世帯での管理だが、整備もせず草に埋もれて人目につかない。明治の廃仏毀釈で羽根井の鳥居さんと一緒に神道になったと語ってくれた。

花ヶ崎村絵図を見ると、素盞鳴神社、八剣神社とも近くに「ヤキ場」があり、八剣神社の石垣には、古墳に使われたと思われる石があると云う。現在の羽根井校区には古墳が見つかっていないので、長い年月の間に失われてしまったといえるが、平成15年、中郷町字後田のスギ薬局のところに遺跡の発掘がなされ、7世紀中期の土壙が一か所検出された。

(11) 大山塚の弘法さま

人道橋近くの萩原さん宅に人々に親しまれた弘法さんと抱き地藏さんが祀られている。尼僧萩原信瑞さんが昭和32年9月11日に99歳で亡くなれるまでお祀りしていた。信瑞さんは当時、市内の最高齢でもあり、葬儀には大野佐長豊橋市長が籠盛持参で会葬された。

弘法さんの日（3月21日）には、お祭りがあり、お詣りに来た老若男女に甘酒やお菓子

の接待があり、近隣の善男善女のお詣りが絶え間なく続いたと伝えられる。

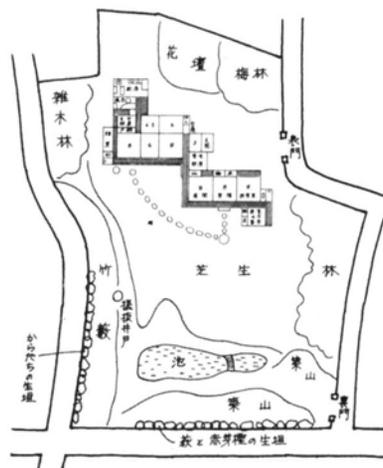
(12) 小栗風葉址と句碑

花田町西郷123番地に小栗風葉（本名／加藤磯夫）邸があり、50年前には立派な庭園があったことを知る人も少なくなった。風葉は晩年、この羽根井に1000坪の敷地に居を構え、大正8年（1919）、平屋建て70坪の住宅、約300坪の庭園を造り「留月荘」と名付けた。

明治30年代に活躍した代表的な作家であり、尾崎紅葉の弟子として、有名な「金色夜叉」を執筆した紅葉の死後「終編金色夜叉」を完結させた、大正15年（1926）1月15日、52歳で生涯を閉じ、「煎葉の香に朝寒の寝覚めかな」の辞世句を遺し、八剣共同墓地内の墓碑の陰に刻まれている。また、風葉の碑は、豊橋公園内三の丸会館の裏にもあり、風葉夫人の加藤竹寿句碑「涼しさや旅をこころのそで軽く」が花園仁長寺境内に建っている。



小栗風葉墓陰句碑



留月荘（見取図）

8 羽根井校区の活動

(1) 総代会のあゆみと活動

終戦直後の総代会

戦前より羽根井の各町には町内会長が置かれていた。当時の主な仕事は、

- 戦争に出掛ける兵隊の見送り
 - 戦地より帰ってきた兵隊の出迎え
 - 防空演習の世話
 - 国から来る配給物資の分配
- などであった。

しかし、終戦とともに人々生活も大きく変わり、戦災に遭った羽根井の人々は極度の食料難に陥った。人々は渥美郡や宝飯郡、遠州（静岡県）など周辺の農家を頼って食料の買出しに出掛けなければならなかった。空襲を受けた野黒や立花・錦など羽根井の大部分の町内には、米・砂糖・みそ・野菜・しょう油・自転車のチューブ・タバコ・塩などが配給物資として町内会長（後の総代）のもとに届けられた。配給物資といっても一回の分量はほんのわずかで、分配の方法は順番に配ったりクジで分けるものもあった。町内会長はいつも配給物資を公平に分けるのに心を痛めた。

太平洋戦争の終戦を境に、日本は大きく方向転換を始めた。日本の封建制の温床が町内会組織にあると見た連合軍総司令部はそれまでの町内会組織を解体させることにした。昭和22年（1947）3月31日をもって、町内会長がしていた各種の仕事は、市へ移管されることになった。

4月1日より町内会長に代わって、連絡員が置かれた。連絡員は町内会長に代わり配給物資の分配のほか、次の仕事をした。

○文書の配布と回覧

市の吏員が持って来た文書を町内の組長宅に届け、組長は回覧箱に入れて各家庭に回す。

多くの文書は回覧したが特定者のものは直接連絡員が各家庭を回った。

○転居者の事務手続き

新しく羽根井に居を構える時には、まず連絡員に申し出た。連絡員は住所を確認した上で転居届けを渡し、新しく入組の町長名を教えた。転入届は連絡員の所に常備してあった。

○税金の令書の配布

市役所から来た令書は組長を通じて各家庭に配られた。野黒町のように納税組合を作ったところもあった。これは、組合員がきちっと収めてくれると、還元金をくれるという制度であった。令書は組長を通して配られていたが、住民の一部から「見られるのはいやだ」という声が上がった。その後、連絡員が直接家庭に配るようになった。

この会においては戦災復興を始めとする羽根井の諸問題が話し合われ、校区としての対応策が協議された。

(2) 市総代会の発足

連絡員制度は昭和22年（1947）3月まで続いた。4月からは連絡員制度に代って総代会が発足した。27年になって、校区代表の連絡員が公会堂に集まり、総代会結成の準備をすることになった。羽根井校区の代表として、野黒の星野さんが公会堂へ行かれた。市総代会の副会長の一人として、羽根井校区の近藤常次郎さんが選任され、その翌年の29年には、市総代会の第2代会長に就任した。近藤さんはその後、33年まで5年間会長の重責を果たした。

市総代会の役員として、昭和43年に白井津賀次さんが、また、55年に中川一男さんがそれぞれ2年間監事を務めた。

(3) 羽根井校区歴代総代会長

昭和28年（1953）年4月1日の市総代会の発足に伴って、各校区には校区総代会がつけられた。羽根井校区総代会の役員は「会長1名、副会長1名、会計1名」と決められ、各町総代の中から互選されることになった。昭和28年以降、平成18年に至る校区総代会長は次の皆さんが務められた。

羽根井校区歴代校区総代会長

初代	近藤常次郎（昭和28年度～33年度）
2代	星野三代治（昭和34年度）
3代	森田美代治（昭和35年度）
4代	近藤常次郎（昭和36年度）
5代	吉見 政治（昭和37年度）
6代	白井津賀次（昭和38年度～44年度）
7代	杉田 留生（昭和45年度～47年度）
8代	中川 一男（昭和48年度～57年度）
9代	河合 武雄（昭和58年度～61年度）
10代	大場 成一（昭和62年度～平4年度）
11代	小山 文雄（平成5年度～9年度）
12代	岩間 洸（平成10年度～14年度）
13代	夏目 章一（平成15年度～現在）

(4) 総代会の主な活動

各町内はその時々、道路舗装・廃水設備・下水処理・歩道橋設置などの問題を抱えていた。こうした生活に直接関わる問題に対して、総代会はその解決のため市当局に積極的に働きかけを行ってきた。

羽根井処理場の建設問題 羽根井地区は駅に近いという地理的条件から、戦災復興後住宅や商店、工場が立ち並びはじめた。こうした発展に伴って、この地域から廃水される汚水の量は年々増加する一方で、柳生川に放出さ



羽根井処理場（羽根井ポンプ場）

れる量も増え続けていた。柳生川の汚れは、河口のあさりや海苔の養殖にも影響を与え、牟呂や大崎の漁業関係者も柳生川の汚水問題について、その解決を市当局に求めた。総代会は市議会に対して何度も陳情を行った。これを受け、市当局は昭和27年（1952）に「下水道拡張五カ年計画と十カ年計画」を立案した。こうして羽根井処理場の建設計画は具体的に動き出すことになった。昭和32年（1957）10月5日、羽根井処理場建設工事は着工され、昭和34年1月20日には通水式が行われた。

花田・大崎線の舗装 昭和36年（1961）、中郷町から大崎町へ通じる道路は未舗装だった。この道路は戦前に海軍道路として造られたもので、交通量が増えるに従って、道路沿いの人達からは、「早く舗装をしてほしい」という声上がり、町総代のもとに要望が寄せられた。こうした中、市土木課、市議会へ陳情書を提出し、その実現を強く働きかけた。羽根井校区からの陳情を受けた市当局はすぐさま現地調査を実施し、昭和39年（1964）に工費82,653,000円、道路延長2,346.5mの工事計画を立てた。

昭和40年11月に着工、44年に校区要望の舗装道路が完成した。

(5) 羽根井校区の市議会議員

羽根井校区からは昭和22年（1947）以降、次の市会議員が出ている。

氏名	任期
小柳津貞三	昭和22.4.30～26.4.29（1期）
近藤常次郎	昭和15.10.10～26.4.29（2期）
〃	昭和30.5.1～34.4.30（1期）
〃	昭和38.5.1～40.3（任期中死亡）
彦坂 只一	昭和3.10.10～22.4.29（4期）
〃	昭和30.5.1～38.4.30（2期）
立岩 新策	昭和42.5.1～54.4.30（3期）
福井 和光	昭和42.5.1～54.4.30（2期）
〃	昭和62.5.1～平成7.4.30（2期）
鈴木 勇一	昭和46.5.1～50.4.30（1期）
広木 良次	昭和46.5.1～58.3.29（2期）
〃	3期目途中で辞職。県会議員へ
河合 武男	昭和62.5.1～平成3.4.30（1期）
小野田温康	昭和62.5.1～平11.4.30（3期）

(6) 羽根井校区各組織の協同体

羽根井校区には、総代会を中心とした各種団体及び校区推薦の役員が関連をもちながら活動を行っている。

総代会は、会長1名、副会長1名、会計1名、監事2名の役員構成である。各種団体も各町から選任された委員で構成され、委員長(会長)、副委員長、会計等の役員構成で年間活動をしている。

これらの組織は、独自で計画、活動する場合もあり、総代会や各種団体が協同して活動する行事もある。

校区内の住民が、明るい地域づくりや助け合いの精神づくりを認識しつつ、住民の親睦、福祉、連帯の精神を深めていくために各種行事を企画、立案することが大切である。そのため総代会、各種団体、推薦役員の連携を明確にしておくことが必要である。

(7) 校区各種団体の活動

総代会や他の会と連携、協力をして、校区住民のための活動をしている。

防火・防災訓練 東海地震、東南海地震がいつ来るか予想できないが、その時を想定して毎年訓練を実施している。市の防災対策課の指導、校区消防団の協力を得ながら校区挙げて訓練をしている。初期消火、起震車体験、非常食の試食、また、何より大切なものは人命保護であり、平成14年に結成された自主防災会を中心に避難誘導を一番の目的とした訓練を実施している。

交通安全キャンペーン 車社会になって年々交通事故は増加の一途をたどっている。交通安全委員会、交通少年団を中心に、豊橋警察署の指導を受けながら、小学校南側道路で交通安全キャンペーンを毎年実施している。交通安全委員の人達は制服を着用し率先して活動をしている。また、毎月0の日には校区内

の要所に朝7時に立って特に車に対して、交通安全へのPRをしている。



交通安全キャンペーン

羽根井夏まつり 昭和45年(1970)、親子・校区民のふれあいを深める目的で子ども会主催の「七夕まつり」が小学校運動場で始まる。大きな笹竹に沢山の飾りを学友団ごとに親子で協力して作成した。

一方、羽根井小学校では「ゆとりの教育」の提唱に沿って、昭和54年度(1979)より学期1回の集会やイベントを開催するようになる。七夕集会、羽根井まつりなどが行われた。昭和60年(1985)頃より校区の「交通安全の

最近の「羽根井夏まつり」
開会式で小学校金管バンドの演奏やふれあい羽根井ひろばの太鼓演奏を行ったのち、夜店や子どものだ自慢大会、盆踊りが行われる。最後を飾るのは花火で、手筒花火、乱玉が30分ほど打ち上げられる。
参加者数は、約1千人で年々増加傾向にある。

〈夜店・担当委員会〉
だんご・うどん(P.T.A)、かき氷・くじ(子ども会)、菓子つかみどり(交通少年団)、金魚すくい(体育委員会)、冷凍ジュース・ケーキ(交通安全委員会)、ジュース(社会教育委員会)、フランクフルト(消防団)、風船つり(学童保育)、抹茶(ふれあい広場)



羽根井夏まつり(平成18年7月29日)

夕べ」が7月の夕方行われるようになる。平成3年（1991）「親と子の交通安全の夕べ」平成4年の創立60周年には「盆踊りと交通安全の夕べ」が開催される。これが「羽根井夏まつり」の原型と考えられ、以降、毎年、夏休みに開催されるようになった。現在では、羽根井小学校区青少年健全育成会主催の行事となり、校区総代会、各種団体、PTAなどが協力し運営している。

社会教育の推進 昭和30年頃までは、市の社会教育課と校区の「社教」が連携して講演会・映画会などを通して活発な成人教育を展開した。しかし、昭和30年の町村合併とその後の高度経済成長、昭和39年の東京オリンピックを境に社会教育活動は下火となる。その頃、「社教」の主な活動は、成人式開催と研修旅行くらいであった。



「羽根井」第1号と55号

平成10年（1998）これまでの活動を見直し、成人式には校区の人による「祝賀演奏」を取り入れたり、コミュニティー活動の充実を目指し広報「羽根井」を発行するなどした。

子どもとのふれあい活動 14年度より実施される「学校週5日制」に対応するため、社会教育委員会・民生児童委員会・更生保護女性会・子ども会・老人クラブ・PTAなどが中心になってふれあい推進特別委員会を結成した。児童と地域住民とのふれあいを通して、健全でたくましい子どもの育成をめざしたものである。平成17年度（2005）の主な活動は次の通り。

①土曜ひろば 土曜日の午前中、年間17回、延べ4,472人参加。

②ふれあい広場 月水金の25分放課に年間112回、延べ8,409人参加。

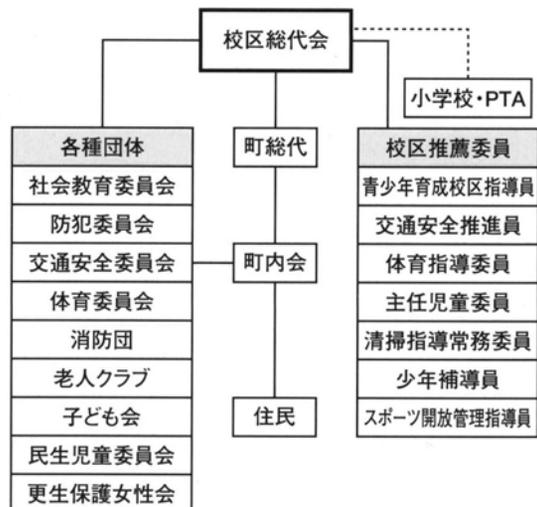
③プール広場 夏休み中の8日間（午前と午後の18回）延べ2,292人が参加。

スポーツ振興 全区民が一体となって行う体育大会を初め、町別対抗のソフトボール大会、家庭婦人バレーボール、ソフトバレーボール大会、子供会主催のフットベースボール・ドッチビー大会など、毎年熱戦が繰り広げられている。また、市のスポーツフェスタでは優秀な成績を収めている。

消防団活動 羽根井校区は第七方面隊に所属し、団員活動として放水競技や小型ポンプ操法競技のため、夜間に練習を行っている。これらは、消防活動の基本として重要であり、これが地域住民の安全に役立っている。

住民の福祉高齢化への対応 民生児童委員、更生保護女性会の活動として、高齢者や児童が安心して暮らせるための諸活動を行っている。現在、少子高齢化社会における重要課題である活動は欠かすことのできない取り組みである。老人クラブでは、健康維持と親睦を目的に各行事へ積極的に参加している。

羽根井校区各種団体等組織図



一 年 表 一

羽根井校区の主なもの(明治以降)

元号	日本・豊橋	羽根井校区
明治1 (1868)	明治維新	・素盞鳴神社、八剣神社正式名称となる
2 (1869)	吉田藩を豊橋藩と改称	
4 (1871)	戸籍法制定	
5 (1872)	学制発布 東海道線開通(新橋-横浜)	・花ヶ崎村、愛知県第15大区第1小区に区分される ・第10中学校区第4小学区となり浄慈院に幡太学校設立
6 (1873)	地租改正	
9 (1876)	朝倉仁右衛門、座繰製糸を始める	・花ヶ崎村の戸数157戸、人口712人の記録がある(合村願)
11 (1878)		・花ヶ崎村、羽田村と合併し、花田村となる(12月8日)
13 (1880)		・第11番小学校が分離・開校
17 (1884)	歩兵第18連隊できる	・花田村、渥美郡第7組戸長役場を設置する ・第11番小学校が花ヶ崎学校となる ・花ヶ崎学校校舎新築(花田村字中郷95番地) ・花ヶ崎学校、幡太学校とも渥美郡尋常小学三吉野学校(現吉田方小)の分校となる
21 (1888)	豊橋駅開業 牟呂用水完成	
22 (1889)	大日本帝国憲法発布 東海道線全通 豊橋町となる	・花ヶ崎学校、幡太学校と再び合併、花田村字西宿に新築移転 ・近藤製糸場(近藤常次郎)できる
23 (1890)	第1回衆議院総選挙	・花田村の戸数423戸、人口2,045人の記録がある
25 (1892)		・幡太分校、花田村立花田尋常小学校となる
27 (1894)	日清戦争・豊橋電灯設立	
28 (1895)	豊橋村を豊橋町に合併	・素盞鳴神社の石鳥居が寄進される
29 (1896)	神野新田完成	
34 (1901)		・秋葉神社<素盞鳴神社内>を祀る
37 (1904)	日露戦争	・製糸工場が建ち始める
39 (1906)	豊橋市制施行 人口37,600人	・花田村、豊橋町・豊岡町と合併、豊橋町大字花田となる ・豊橋市大字花田となる
40 (1907)	大口喜六初代豊橋市長	
41 (1908)	豊橋師団誘致 市内に電話通じる	・豊橋市立花田尋常小学校となる ・豊橋馬車株式会社設立(牟呂市場・花田中央間往復)
42 (1909)	市章制定 X	・豊橋瓦斯(中部瓦斯の前身)設立
43 (1910)	韓国併合	・小栗風葉、花田字南新起に居を構える
44 (1911)		・花田尋常高等小学校新築移転(花田字大塚) ・大林製糸、寺沢より移転 ・小松製糸、渥美郡より移転
45 (1912)	明治天皇崩御	
大正1 (1912)		
2 (1913)	市立図書館開館	
3 (1914)	第一次世界大戦に参戦 東京駅開業	・白河町秋葉神社に大正3年の銘が見られる
4 (1915)		・白髭大神八剣神社に合祀
5 (1916)	アインシュタイン相対性原理を発表	・大字を町に改称、豊橋市花田町となる
6 (1917)		・御大典記念前田耕地整理事業が始まる ・豊橋花田郵便局開設
7 (1918)	市内に米騒動起きる 第一次世界大戦終結	
8 (1919)		・小栗風葉、留月荘(花田町字西郷)新築
10 (1921)	原敬暗殺	・野黒町秋葉神社に大正10年の銘が見られる
14 (1925)	市電開通 普通選挙法公布	・立花町秋葉神社に大正14年の銘が見られる ・渥美電鉄(花田・田原間)開業
15 (1926)	12.25大正天皇崩御	・小栗風葉死去
昭和1 (1926)		・この頃町内組織として6町あった(羽根井・中郷・八通・野黒・立花・中央) ・牟呂バスの営業開始
2 (1927)		・羽根井派出所設置 ・渥美電鉄、花田・新豊橋間開通 ・素盞鳴神社から八剣神社へ塞神社が分社される
3 (1928)	八幡耕地整理事業始まる	
4 (1929)	世界大恐慌	・豊橋駅西口開業
5 (1930)	上水道通水	・七面結社(後の大法寺)できる
6 (1931)	満州事変 公会堂できる	・花ヶ崎共存園が花ヶ崎学校跡地にできる
7 (1932)	清川正二ロスオリンピック金メダル	・牟呂村字郷社東・往還西・往還東が往完町となる
8 (1933)	日本国際連盟を脱退	・羽根井尋常小学校開校 ・羽根井には約100の製糸工場があった

元号	日本・豊橋	羽根井校区
昭和 9 (1934)	豊橋動物園向山へ	・花田町字野添・五丁・八剣・羽根井前・久保田が羽根井町から分かれ、錦町をつくる ・花ヶ崎共存園が花ヶ崎保育園と改称 ・八剣神社旧社殿造営
10 (1935)		・花田跨線橋渡橋式
11 (1936)	2.26事件	・八剣神社の神楽が復活する ・柳生川運河竣工式
12 (1937)	日中戦争起こる	
13 (1938)	国家総動員法公布	・丸飼料、柳生川運河筋へ移転
14 (1939)	米穀配給統制法	・羽根井町が3町に分かれる (第一羽根井、第二羽根井、第三羽根井) ・大日本兵器の工場ができる
15 (1940)	日独伊三国軍事同盟成立	・羽根井尋常小学校、高等科を併設し、羽根井尋常高等小学校となる ・豊橋精機の工場ができる ・八通町秋葉神社に昭和15年の銘が見られる
16 (1941)	太平洋戦争起こる	・羽根井国民学校と改称
18 (1943)	学徒動員体制確立	・花ヶ崎保育園、戦時保育園と改称 ・豊橋瓦斯、浜松瓦斯と合併し、中部瓦斯となる
19 (1944)	東南海地震が起きる	・羽根井国民学校校庭に防空壕できる ・旭航空兵器設立
20 (1945)	三河地震 広島長崎原爆投下 豊橋空襲 終戦	・豊橋空襲で校区の大半が焼失 ・白井産業の設立
21 (1946)	豊橋市戦災復興計画 豊橋駅完成 天皇陛下行幸	・花ヶ崎保育園、羽田保育園分園と改称 ・羽根井郵便局設置 ・花中町が中郷から分かれる
22 (1947)	教育基本法の公布 六・三制実施 第1回市町村長選挙 大竹藤知市長(15代) 日本国憲法発布	・羽根井小学校となる ・羽根井小PTA発足 ・西部第一中学校開校 ・羽根井校区社会教育委員会できる ・イチビキ製菓(水鳥製菓)大日本兵器跡地へ移転
23 (1948)	新制高校発足(男女共学) 極東軍事裁判	・西部第一中学校が羽田中学校と改称 ・丸織紡績、豊橋精機跡地へ移転
24 (1949)	湯川博士ノーベル賞受賞	・豊橋戦災復興事業始まる ・衛生委員会設置
25 (1950)	朝鮮戦争起こる 豊橋民衆駅できる	・南中央町が白河町になる ・豊橋市更生保護婦人会羽根井校区支部結成 ・羽田中学校校舎完成
26 (1951)	サンフランシスコ平和条約 日米安全保障条約 第1回NHK紅白歌合戦放送	・校区連絡委員会の結成、養護学校開設 ・羽根井小学校給食室新設 ・羽田保育園分園が花ヶ崎保育園と改称し、園舎新築移転 ・野黒町公民館できる ・光陽製菓が柴田製菓跡地へ移転
27 (1952)		・前田耕地整理組合解散に伴い、地番変更(花中町・羽根井町・中郷町・花田町西郷・花田町字南新起)
28 (1953)	13号台風 テレビ放送開始	・校区総代会ができる ・子供会結成 ・柳生川運河堤防改修
29 (1954)	豊橋産業文化第1大博覧会開催	・大山塚(野黒)踏切閉鎖 ・塞神第一踏切閉鎖
30 (1955)	二川・石巻・高豊・老津・前芝・賀茂・杉山 各村が豊橋市に合併 人口20万人	・豊橋市健民少年団羽根井校区隊結成 ・大山塚(野黒)人道橋完成
31 (1956)	豊橋市制50年	・第一羽根井が羽根井本町となる ・第三羽根井が羽根井町となる ・八通町公民館完成
32 (1957)	南極「昭和基地」開設	・第二羽根井が羽根井元町となる
34 (1959)	伊勢湾台風 皇太子さま正田美智子さまとご結婚 吉田大橋竣工	・復興土地区画整理による地番の変更(白河町・野黒町・立花町・羽根井本町・錦町) ・羽根井処理場完成
35 (1960)	安保闘争	・羽根井小が給食優良校として文部大臣賞受賞
36 (1961)	国勢調査 豊橋人口215,513人	・往完町公民館完成 ・第一回羽根井校区体育大会開かれる
37 (1962)	金田正一奪三振3,514の世界記録	・素蓋鳴神社現社殿完成 ・羽根井小テレビ学習始まる、視聴覚教育奨励賞受賞

元号	日本・豊橋	羽根井校区
昭和38 (1963)	豊橋駅西口階上駅完工	・羽根井校区老人クラブ結成
39 (1964)	オリンピック東京大会 東海道新幹線開通	・錦町文化センター完成
40 (1965)	豊川放水路完成	・中郷町公民館完成
42 (1967)	市民文化会館できる	・八剱神社現社殿完成 ・光陽製菓宝飯郡一宮町へ移転 ・羽根井小南側歩道橋完成
43 (1968)	小笠原諸島返還 明治百年記念式典 郵便番号制スタート	・羽根井小日本一健康優良学校として表彰される
44 (1969)	東名高速道路開通 アポロ11号人類初の月着陸	・県道花田・大崎線が舗装される ・八剱三味場移動整理
45 (1970)	日本初の人工衛星打ち上げ 日本万国博開催	・羽根井本町公民館できる ・羽根井ポンプ場完成 ・羽根井小PTA文部大臣賞表彰を受ける
46 (1971)		・豊橋駅東西連絡地下道完成
47 (1972)	豊橋港開港 沖縄返還 札幌冬季オリンピック開催	・町名変更により羽根井西町できる
48 (1973)	石油ショック	
49 (1974)		・羽根井校区交通少年団結成
50 (1975)	山陽新幹線開通	・往完保育園開園
51 (1976)		・羽田中学校区青少年健全育成会結成 ・花中ちびっこ広場できる
52 (1977)		・羽根井地区市民館完成 ・花ヶ崎保育園園舎全面改築
53 (1978)	豊橋技術科学大学開校	・往完郵便局設置
55 (1980)	豊橋市資源化センター開設	
56 (1981)	死亡原因1位「ガン」 100才以上高齢者1,072人	・羽根井元町公民館完成 ・羽根井小体育館完成 ・塞神社(八剱神社境内)の社が建て直される ・花ヶ崎村絵図を発見
57 (1982)		「羽根井小創立50周年記念誌」出版 ・水鳥製菓明海町へ移転
58 (1983)	東京ディズニーランド開園	・豊橋市中央図書館完成 ・深見工業青竹町へ移転 ・県営住宅(往完町)完成 ・羽根井小学校ソニー優良校に選ばれる ・八通町の祭りみこし復活
60 (1985)	日航機墜落500名死亡	・羽根井小視聴覚教育賞(文部大臣賞)受賞
61 (1986)	市制施行80周年 伊豆大島大噴火	・白河町公民館完成 ・羽根井ちびっこ広場できる ・八剱神社境内忠魂碑再建
62 (1987)		・校区史「わが町羽根井」出版
63 (1988)	自然史博物館開館	
64 (1989)	昭和天皇崩御	
平成1 (1989)	総合体育館開館	
2 (1990)	公共地下駐車場パーク500完成	・羽根井小学校新校舎竣工式 ・記念碑除幕式
3 (1991)	二川宿本陣資料館開館	
4 (1992)	豊橋市総合動物園開園	・羽根井小学校区青少年健全育成会結成 ・羽根井小学校創立60周年記念式典
5 (1992)	市の人口が35万人を突破	
6 (1993)	ライフポートとよはしオープン	・羽根井小学校学習用コンピュータ9台設置
8 (1996)	新市民病院開院 市役所新庁舎(現・東館)完成	
9 (1997)	豊橋駅東西連絡通路全面完成	
10 (1998)		・羽根井小プール温水シャワー完成
11 (1999)	全国22番目の中核市へ移行	
13 (2001)	市の人口が37万人を超える	
14 (2002)	JR二川駅の新駅舎オープン 豊橋市出身の小柴昌俊さんノーベル物理学賞受賞	・「土曜ひろば」始まる
16 (2004)	総合福祉センター「あいトピア」オープン	・羽根井小2学期制研究協力校委嘱を受ける
18 (2006)	市制施行100周年	・とよはし100祭記念羽根井夏まつり開催(7月29日) ・羽根井校区史完成

編集後記

永く続き移り変わってきた羽根井、これからも営々と進み行く羽根井、私たちはその時代に生きている。ここに出来る限り忠実に校区の歴史としてとどめておく校区史発刊に、編集者一同最大限の知恵と時間をかけて取り組みました。平成17年7月にスタートした編集委員会も、会を重ねるごとに歴史の流れや史実を模索し、資料を調査したり、関係機関へ聞き込みをするなど意欲的になって、時には会議が深夜に及ぶこともありました。少しでも読みやすく、わかりやすい表現、表記に何度となく推敲しました。

出来上がった冊子は十分満足のいくものではありませんが、校区の歴史の一端を記し残すものであると信じます。

本書の編集にあたり数多くの方々のご指導、ご協力に感謝とお礼を申し上げます。

協力・関係者（敬称略）

豊橋市役所
愛知県東三河建設事務所
豊川用水総合事業部
愛知県豊橋土木事務所
丸上製作所
花ヶ崎保育園
往完保育園
羽根井小学校
羽田中学校
白井たつ子
鳥居 和孝
小野田 浩
白井 清夫
富安 健次
菅野 幸生

編集委員

夏目 章一
小松喜一郎
白井 暉二
中村 昭宏
木戸 忠雄
余郷 修一
大谷 順子
藤城 行男
筒井 泰雄
原田 博口
河合 幸子
村田 恭一

参考文献

愛知県災害誌（名古屋地方気象台）
愛知県地学のガイド（庄子士郎）
台風13号による被害状況調（豊橋市）
豊橋市消防年報（豊橋市消防本部）
豊川市史（豊川市史編纂委員会）
東三河大地のなりたち（菅谷義之）
東三河の地盤（建設省計画局）
福岡むかしと今（福岡小学校）
羽根井小創立50周年記念誌（羽根井小学校）
豊橋市下水道50年史（豊橋市下水道50年史編纂委員会）
豊橋整地事業誌（豊橋整地事業誌編纂委員）
親と子の面白地学ハイキング（池田芳雄）
大地は語る（池田芳雄）
奥三河1600万年の旅（横山良哲）
豊橋市自然環境保全基礎調査報告書（豊橋市）
東海の自然をたずねて（東海化石研究会）
地底たんけん（豊橋市自然史博物館）
豊川の自然を歩く（中西 正・池田芳雄）
豊橋の自然発見（豊橋の自然発見編集委員会）
豊橋市戦災復興史（戦災復興史編纂委員会）
豊橋市の商業・豊橋市の工業（豊橋市）
わが町羽根井（羽根井小学校）
羽田中30周年（羽田中学校）
豊橋教育の源流（夏目定寛）
豊橋市神社誌棟札集成（神社庁豊橋支部）
豊橋風景スケッチ画集（白井暉二）
花ヶ崎村絵図の考察
羽根井遺跡（1）（豊橋市教育委員会）
豊橋の文学碑ガイドブック（中央図書館）
多聞山日誌（浄慈院住職 山澄覚禪師）

校区のあゆみ 羽根井

平成18年12月25日発行

編集 羽根井校区総代会
羽根井校区史編集委員会
発行 豊橋市総代会
印刷 共和印刷株式会社

R2100
環境省 印刷技術センター

PRINTED WITH
SOYINK



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋